

みなみ ぎ おん ばら
市原市南祇園原遺跡
もち づか
持塚5号墳
じょう しん だい つか ぐん
上神台塚群

2002

市 原 市 教 育 委 員 会
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は房総半島の中央に位置し、眼前に東京湾を見渡す養老川下流域には、国分寺台の台地が広がっています。この一帯は、奈良時代に上総国分寺や国分尼寺が建立された場所で、原始以来の遺跡が密集して発見されています。

市庁舎や市民会館の周りに閑静な住宅街の広がる国分寺台に土地区画整理事業が計画されましたのは、昭和45年のことです。昭和47年から昭和63年までの16年間にわたって行われました発掘調査では、43の遺跡が調査され多くの成果をあげることができました。

今回報告するのは、南祇園原遺跡ならびに上神台塚群です。南祇園原遺跡は上総国分尼寺跡の南に位置する遺跡で、集落ならびに古墳群（南祇園原古墳群）で構成されています。また、上神台塚群は西広貝塚の西側に展開していた塚群で、持塚5号墳（旧上神台群集墳1号）を含んでいます。

いずれも、貴重な資料を提示する遺跡で、市原市の郷土史としてはもとより、東京湾岸の古代史を解明する上で、大変貴重な手がかりを得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。国分寺台遺跡群の報告書としては11遺跡目にあたります。この本が、学術的な資料としてはもとより、市民の方々に広く活用され、このを通して市原市の歴史解明に役立っていくことを願ってやみません。

また、遺跡の発掘調査ならびに報告書刊行にあたって、多大なご尽力をいただきました文化庁文化財保護部記念物課、千葉県教育庁文化課、旧上総国分寺台遺跡調査団および（財）市原市文化財センターをはじめとする関係各位に対しまして、深く感謝の意を表します。

平成14年3月

市原市教育委員会

教育長 竹 下 徳 永

序 文

国分寺台地区の埋蔵文化財の発掘調査が本格的に開始されたのは、今から30年程前のことでした。既にかつての風景は一変し、落ち着きのある住宅街としての趣を漂わせるまでに至っております。著名な遺跡が数多く存在したことすら御存知ない方も多くいらっしゃるのではないかと推察いたします。

恵まれた自然環境のもと、古くから先人達の生活の拠点となっていた本市には、数多くの遺跡があります。中でも国分寺台地区は質・量ともに豊富な内容を持ち、全国的にも注目されてきた地域であります。ただ、ともすると、大規模な遺跡、珍しい遺物が出土した遺跡などに目が奪われがちですが、現在でもそうであるように、多様な社会の結びつき、また大小さまざまな社会との関係との中で歴史が作りあげられてきたことを、忘れないようにしたいものです。

今回ここに報告いたします3つの遺跡は、国分寺台地区の遺跡の中ではいままで、ほとんど省みられることのなかった遺跡であります。本市とりわけ国分寺台地区の歴史の一端が刻まれているという意味では貴重な成果と言うことが出来るでしょう。

本書を手にとられた皆様におかれましては、本市の歴史の1ページにこの調査成果を加えていただいた上で、国分寺台地区の整理、報告事業の進捗につき今後共温かい目で見守って下さることを切に要望するとともに、なお、一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、発掘調査から整理、報告に至るまで、多大な御協力をいただきました、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会、市原市国分寺台土地区画整理組合、御茶の水女子大学鷹野光行先生、ならびに諸作業に直接従事された各位に対し、ここで改めて謝意を表するものであります。

平成14年3月

財団法人市原市文化財センター
理事長 磯田正嗣

例 言

1. 本書は、市原市国分寺台土地地区画整理事業に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に所収したのは以下の3遺跡である。
 1. 南祇園原遺跡 市原市根田字南祇園原484（現市原市国分寺台中央2丁目2番、市原市埋蔵文化財分布地図遺跡番号739-①～⑤を含む）
 2. 持塚5号墳 市原市西広426-5の一部（現市原市西広4丁目9番の一部 市原市埋蔵文化財分布地図 遺跡番号755-⑤）
 3. 上神台塚群 市原市西広423-1他（現市原市南国分寺台4丁目9番他）
遺跡名については、市原市教育委員会ふるさと文化課と協議の上、以下の通りとした。
 - ①南祇園原遺跡は、巳ノ輪遺跡として調査されたが、地籍上は根田字南祇園原に属した。市原市埋蔵文化財分布地図（以下、分布地図と略す）では、当該地に南祇園原古墳群として5基の方墳が表記されている。遺跡の内容は、古墳時代前期の方形周溝墓5基および弥生時代後期、奈良・平安時代の住居跡を含むものであり、「南祇園原遺跡」として報告する。
 - ②持塚5号墳は、当初上神台塚群を構成する塚の1つとして調査されたものであるが、調査の結果方墳であることが判明し、持塚古墳群を構成する古墳の1つとして位置づけられるに至っている。当該古墳は分布地図上では遺跡名は「持塚古墳群」、遺跡番号は「755-⑤」であり、「持塚5号墳」として報告する。
 - ③上神台塚群は、分布地図上には表記はないが、調査時の名称を踏襲する
3. 発掘調査は、市原市教育委員会の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、上総国分寺台遺跡調査会が実施し、整理・報告事業は、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 発掘調査の対象は、南祇園原遺跡が2000m²、持塚5号墳が古墳1基、上神台塚群が塚9基である。
5. 調査期間および担当者は以下の通りである。

南祇園原遺跡	調査期間	昭和52年11月～12月	担当	須田勉・鷹野光行
持塚5号墳	調査期間	昭和47年12月	担当	須田勉・宮本敬一
上神台塚群	調査期間	昭和47年12月	担当	須田勉・宮本敬一

整理は、南祇園原遺跡を高橋康男が、持塚5号墳・上神台塚群を櫻井敦史が担当した。
6. 遺跡の調査コードは、南祇園原遺跡は055、持塚5号墳は311、上神台塚群は312～320である。
7. 本書の執筆は、南祇園原遺跡は高橋、持塚5号墳は上神台塚群、櫻井が行い、編集は櫻井が行った。
8. 本書で示す方位は磁北である。
9. 本書で掲載した挿図の縮尺は、遺構に関しては住居跡1/60、方形周溝墓1/120、古墳・塚1/150、遺物に関しては、南祇園原遺跡では土器実測図は1/4、石器、拓影図は1/2、持塚5号墳・上神台塚群では1/3である。
10. 遺構の名称については、正式には、たとえば「201号住居跡」とするが、単に「201」あるいは「201住居跡」等と呼称する場合がある。
11. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行1/25,000地形図「五井」「蘇我」「姉崎」「海士有木」である。
12. 調査の実施にかかる書類については良好なものが残されていないところから、事実経過については遺漏がある可能性がある。その責については、整理担当者が負うものであるが、調査体制の不十分であった時期である点等、斟酌いただければ幸いである。
13. 出土遺物については市原市埋蔵文化財調査センターで保管している。
14. 本書を作成するに当たり、市原市国分寺台土地地区画整理組合、御茶の水女子大学教授鷹野光行先生には多大なご協力をいただいた。ここで記して、謝意を表させていただく。

本文目次

序文	(2) 方形周溝墓	16
例言	(3) 旧石器時代・縄文時代の遺物	24
第1章 南祇園原遺跡	(4) その他の出土遺物	26
1. 遺跡の位置と環境	4. まとめ	27
2. 調査に至る経緯	第2章 持塚5号墳・上神台塚群	31
3. 検出した遺構と遺物	1. 遺跡の立地と調査概要	31
(1) 竪穴住居跡	2. 遺構と遺物	31

挿図目次

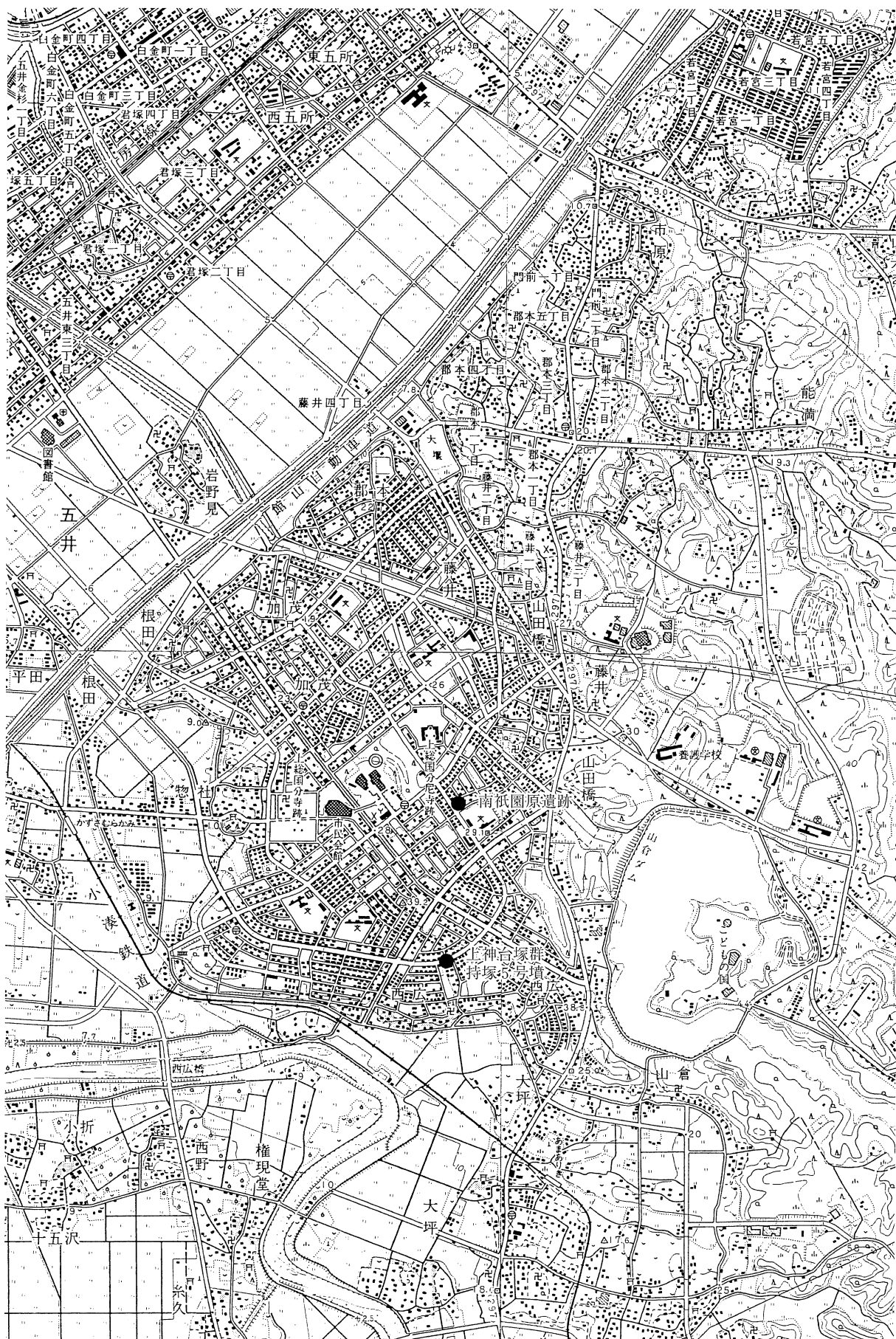
第1図 遺跡位置図	第15図 101号方形周溝墓	17
第2図 周辺遺跡分布図	第16図 102号方形周溝墓	18
南祇園原遺跡	第17図 103号方形周溝墓	19
第3図 南祇園原遺跡全体図	第18図 104・105号方形周溝墓	21
第4図 201号住居跡	第19図 103・104出土遺物	23
第5図 202号住居跡	第20図 旧石器時代・縄文時代の遺物	24
第6図 201・202出土遺物	第21図 その他の出土遺物	25
第7図 203号住居跡	持塚5号墳・上神台塚群	
第8図 204号住居跡	第22図 遺跡周辺の地形図（現在）	32
第9図 203・204出土遺物	第23図 遺跡周辺の地形図（調査時）	32
第10図 205号住居跡	第24図 上神台塚群トレンチ配置図	33
第11図 206出土遺物	第25図 持塚5号墳トレンチ配置図	34
第12図 206・207号住居跡	第26図 持塚5号墳・上神台2号塚土層断面図	35・36
第13図 206出土遺物	第27図 上神台2号塚トレンチ配置図	37
第14図 208号住居跡	第28図 持塚5号墳・上神台塚群出土遺物実測図	37

表目次

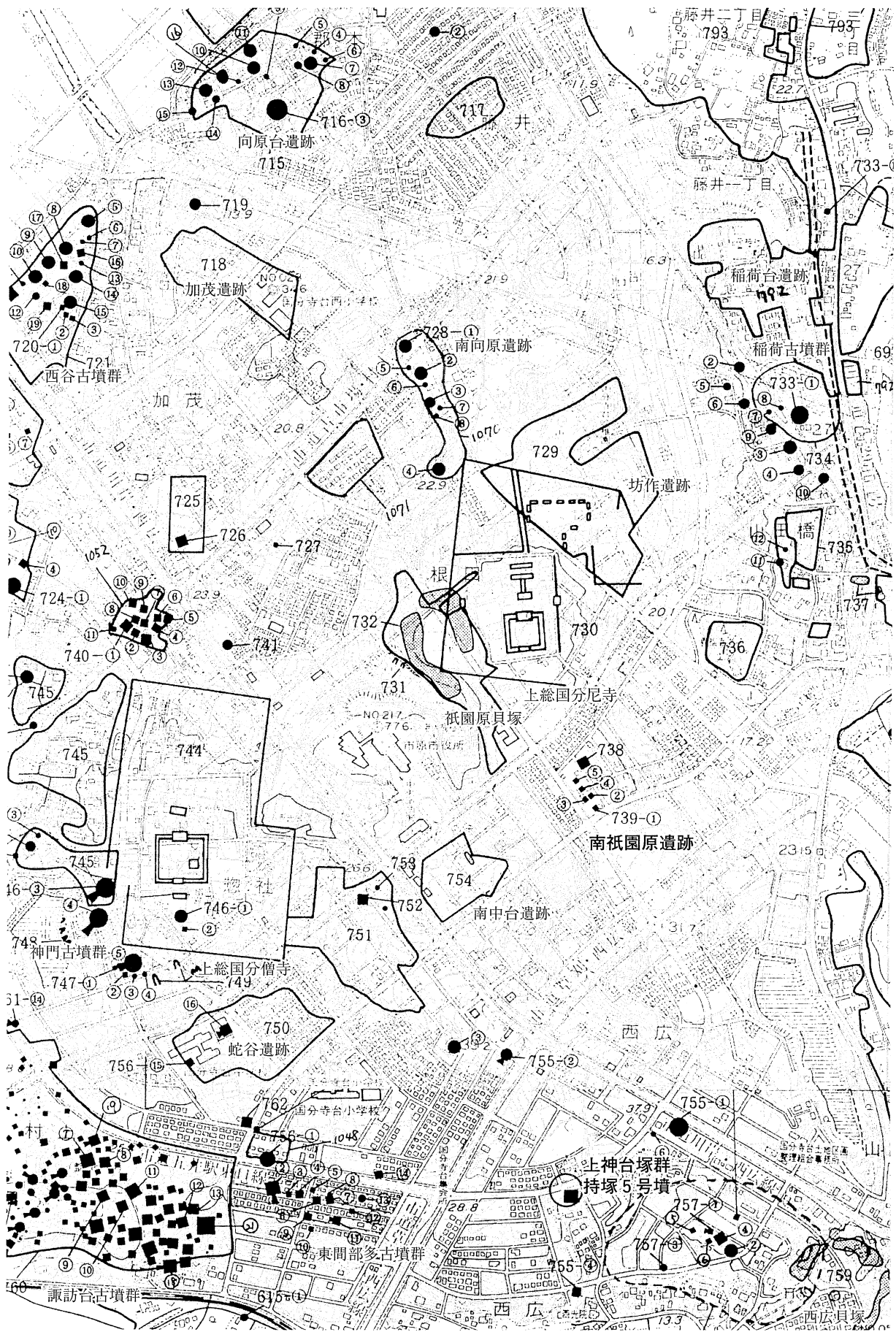
第1表 南祇園原遺跡出土遺物観察表	第4表 持塚5号墳・上神台塚群遺構一覧表	38
第2表 南祇園原遺跡住居跡一覧表	第5表 持塚5号墳・上神台塚群出土遺物観察表(土器)	38
第3表 南祇園原遺跡方形周溝墓一覧表	第6表 持塚5号墳・上神台塚群出土遺物観察表(瓦)	38

図版目次

図版1 遺跡の位置と周辺地形
南祇園原遺跡
図版2 南祇園原遺跡全景／201号住居跡
図版3 202号住居跡／203号住居跡／203号遺物出土状況
図版4 204号住居跡／206号・207号住居跡／208号住居跡と周辺の攪乱土坑
図版5 205号住居跡／206号住居跡／205号・206号カマド
図版6 101号方形周溝墓／102号方形周溝墓／103号方形周溝墓
図版7 104号方形周溝墓／104号遺物出土状況／105号方形周溝墓
図版8 201号・203号出土遺物
図版9 203号・204号出土遺物
図版10 205号・206号出土遺物
図版11 103号・104号出土遺物
図版12 遺構外出土遺物
持塚5号墳・上神台塚群
図版13 遺跡の航空写真／調査前全景／持塚5号墳
図版14 持塚5号墳／1号塚／2号塚
図版15 3号塚／4号塚／5号塚
図版16 5号塚／6号塚／7号塚／8号塚



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)



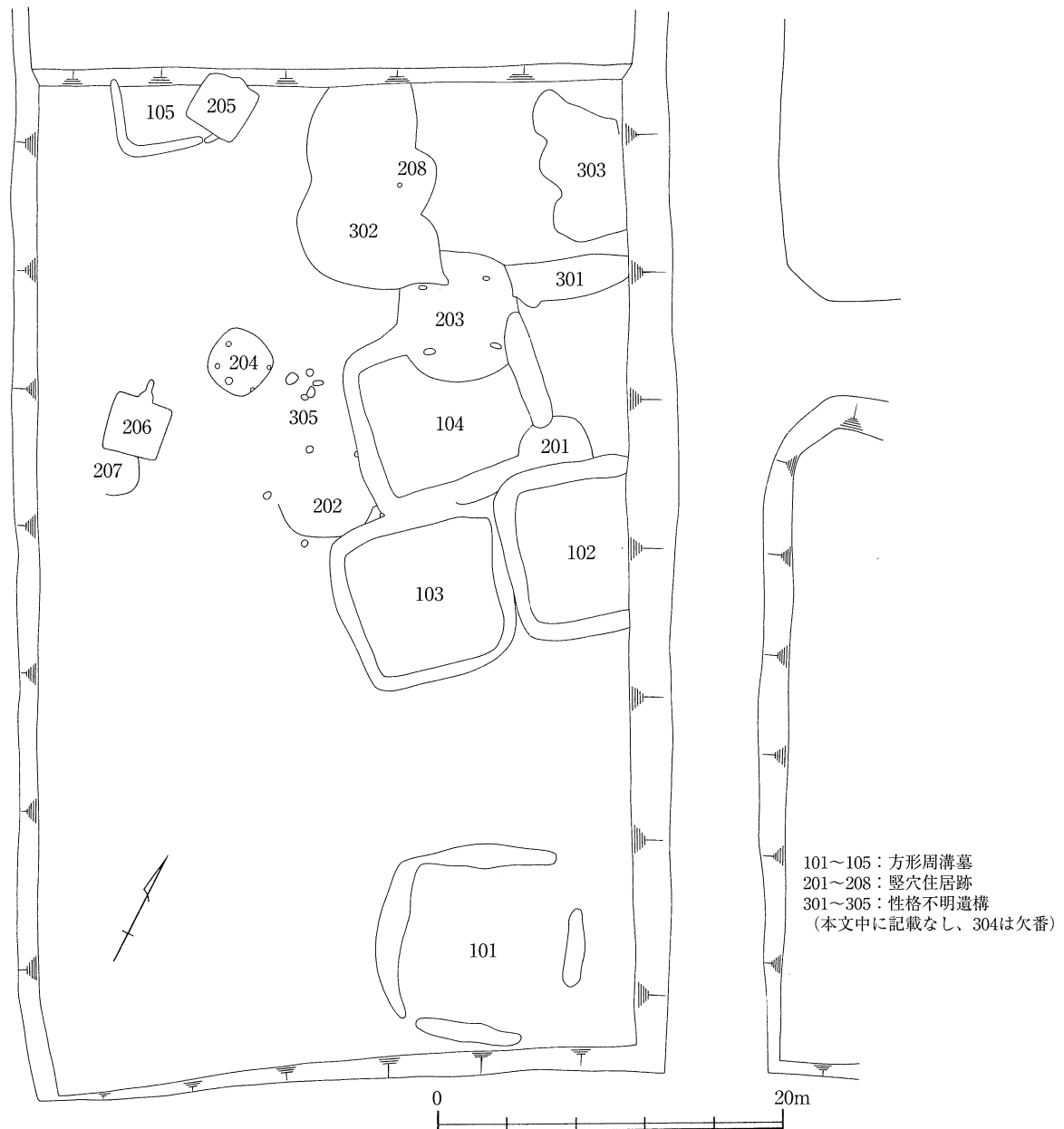
第2図 周辺遺跡分布図

(1/10,000, 背景は区画整理前現況図)

第1章 南祇園原遺跡

1. 遺跡の位置と環境 (第1・2図)

南祇園原遺跡は、東京湾東岸の海岸平野に直接注ぐ、2本の小河川にはさまれた標高約30mの台地上に存在する。海岸平野までは約1.5kmの位置にあり、台地の平坦面は東西の幅約200mである。同一台地上の北方約300mの位置には、上総国分尼寺があり、その北方には尼寺の造営に関わる坊作遺跡があり、南東約1kmの台地の付け根部分には西広貝塚がある。この、長さ約2.5kmの台地上にはこの他に、北端に向原遺跡、その約500m南には南向原遺跡、さらに500m南には祇園原貝塚と、大略500mおきに遺跡が立地している。いずれもこの台地の西に寄っている。区画整理前の地形図を見ると、同じ台地の東側斜面は、西側斜面に比べて台地の浸食が激しいように見え（小支谷が約100m間隔で存在し、それぞれ100m程の奥行きがある）、良好な平坦面を確保し難かったというのも、遺跡の



第3図 南祇園原遺跡全体図 (1/400)

占地在西に偏る要因の1つであったかもしれない。

本遺跡の内容を先取りして少し触れておくと、弥生時代後期の集落は坊作遺跡で見られるが、古墳時代前期の集落あるいは墓域は同一台地上では希薄である。(西側の谷をはさんだ約300m先の台地上には南中台遺跡がある。未整理だが北陸系土器の出土で知られる⁽¹⁾。)奈良・平安時代については、国分尼寺、坊作遺跡が存在することは、ここで改めて引き合いに出すまでもないであろう。

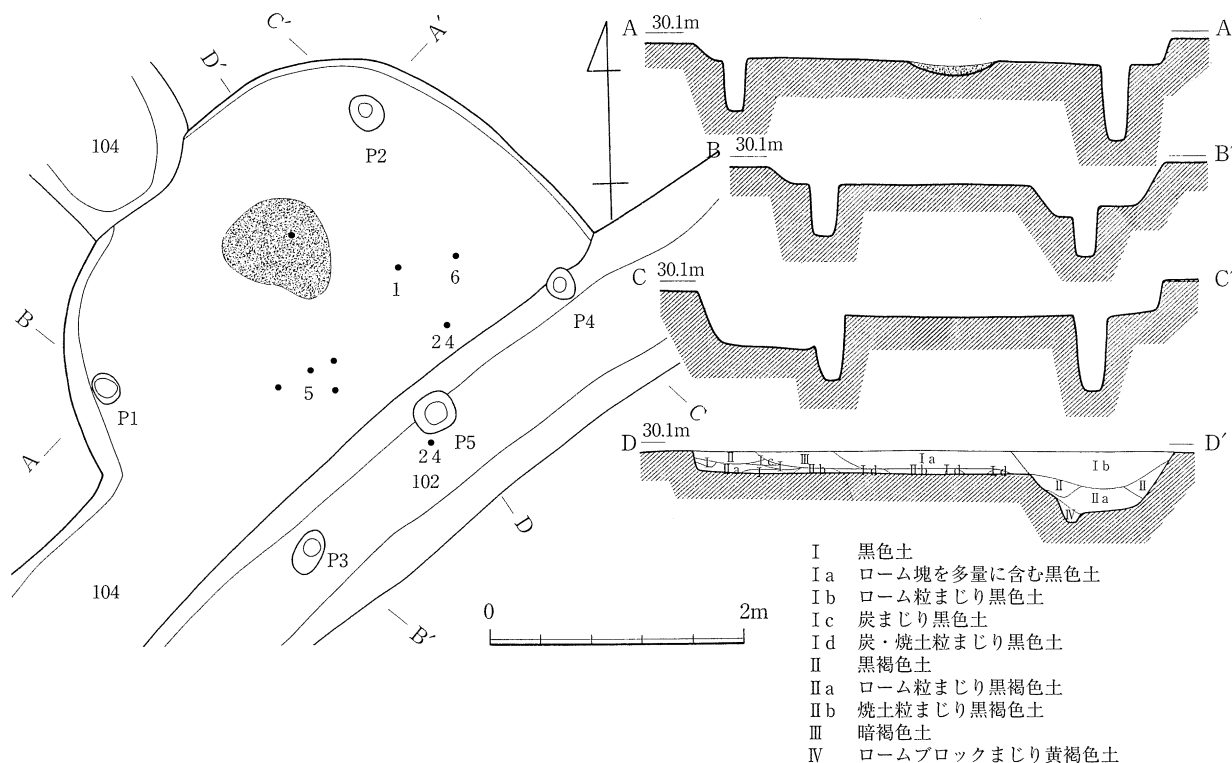
(1) 比田井克仁 1987 「南関東出土の北陸系土器について」 古代第83号

2. 調査に至る経緯

本遺跡は、国分寺台土地区画整理事業に関わるものである。調査にいたる経緯については、他の遺跡とは若干異なるものであったと聞いている。あくまで伝聞にもとづくものであるが、大略以下の通りである。

遺跡全体図(第3図)から明らかなように、調査は、既に造成を終え雛壇が形作られた後に行われている。これは、当初の調査計画からもれ、造成が終了していたことを示すものである。造成終了後に、遺跡の存在が明らかとなり、そのまま放置する事態を避け、区画整理組合の協力を得、調査を実施することとなったものである。調査期間は、不明確な点もあるが、調査時作成図面は昭和52年11月12日作成のものが最も古く、同12月10日作成のものが最も新しい。約1ヶ月間の調査だったと判断される。調査の実施に際しては、磁北方位を基準に方眼杭を設置し、遺構平面図を作成した。水準については、近隣の水準既知点から調査区内に仮ベンチマークを設定して対応した。遺構番号については、100番台が方形周溝墓、200番台が竪穴住居跡である。300番台はそのほかの遺構で、後世の攪乱と考えられるものが多く、全体図に示すに留め、遺物については一部を掲載した。

なお、遺跡の名称については、従来巳ノ輪遺跡と呼称されてきたが、厳密には、同小字は道1つを隔てて東側の大字山田橋地籍に属するものであり、今回の報告では本来の根田字南祇園原の小字名を採用し、また埋蔵文化財分布地図との整合を図り南祇園原遺跡とした。



第4図 201号住居跡

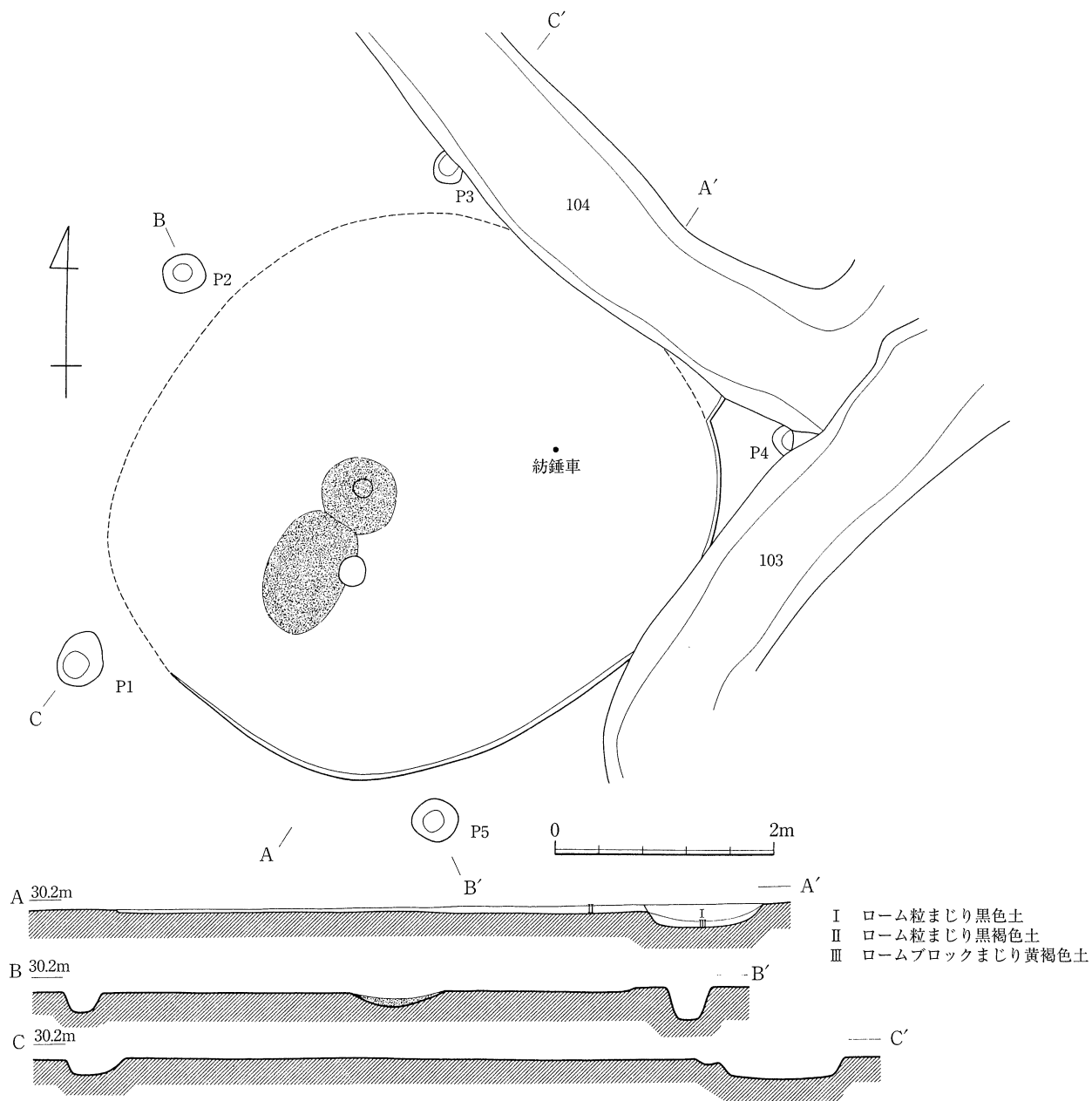
3. 検出した遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

201号住居跡（第4図）

調査区の中央やや東寄りの部分で検出された。南半部分を102方形周溝墓の北辺により切られている。この北辺より南側には、住居跡が及んでいないところから、長軸は大きく見ても4m、短軸も同程度であろう。北西及び南西の壁の一部はいずれも104方形周溝墓により切られている。南西部分はこの住居跡の床と、104の周溝底とは高低差があまりなく、境界は判然としない。支柱穴はP1～P4で、P5は入り口ピットであろうか。P1P5間およびP3P4間は共に約3m、P1P3間、P2P3間は共に約2.1mで、梁行の方が長い。炉は、P1P2の中間で検出された。

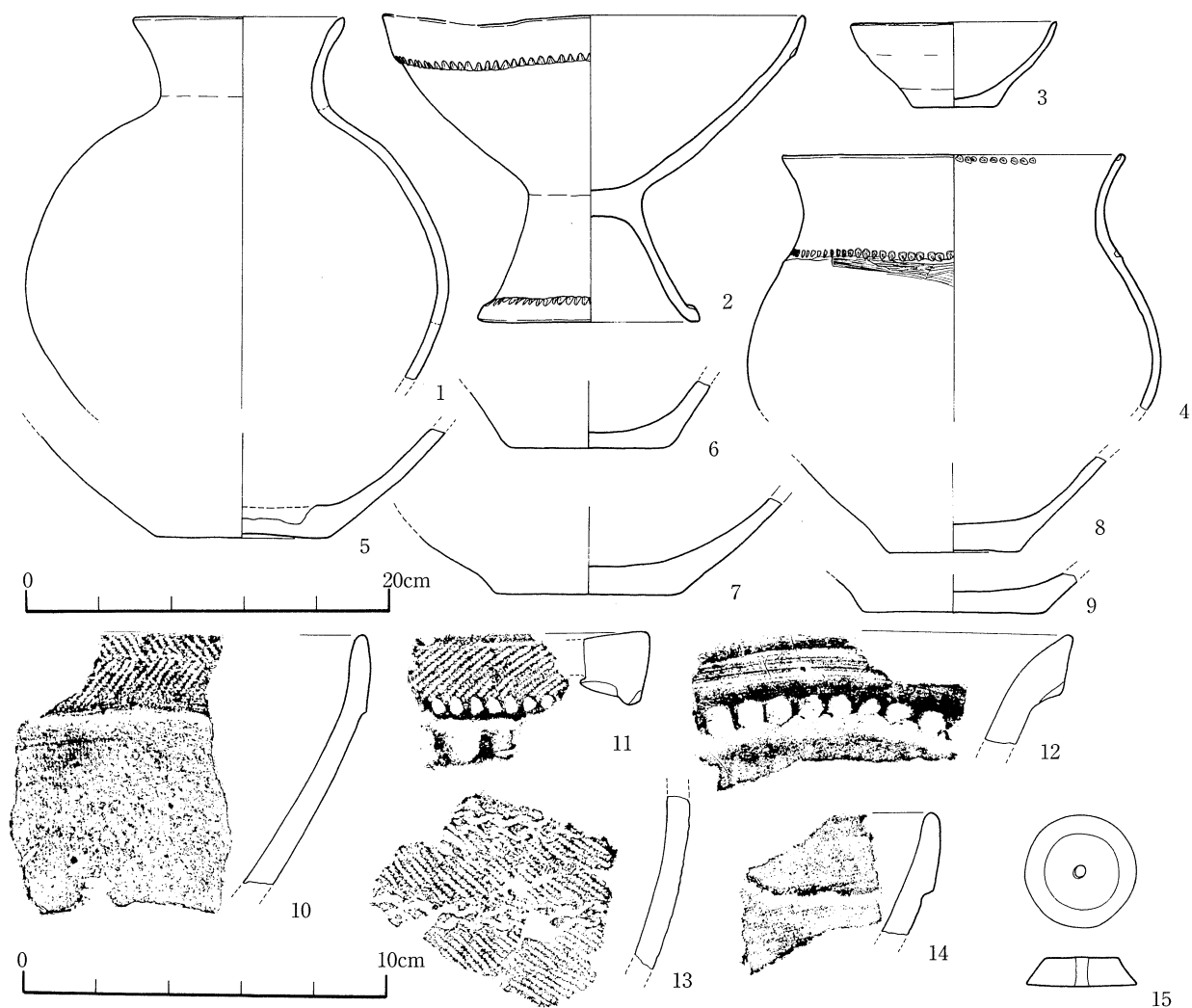
遺物は第6図1～14に示したようなものが出土している。1は壺で、球形に近い胴部にわずかに外反する、やや短い素口縁の頸部がのる。外面、口縁直下には水平方向の、整形時の条線が認められる。頸部下半から胴部上半にかけては垂直方向のナデあるいは弱いミガキで、それ以下の部分は、水平方向のナデあるいは弱いミガキである。内面は頸部では水平方向のナデ、胴部もナデと見られるが、整形痕は明瞭ではない。2は高坏で、口縁部及び脚端部は折り返し風で、いずれにも、丸棒状工具によるキザミが加えられる。内面は、水平方向の弱いミガキ、外面は坏部では水平方向の弱いミガキ、脚部は垂直方向の弱いミガキ、折り返し部は水平方向のナデである。3は小振りの鉢である。外面は口縁直下に水平方向の条線が見え、その下方は、左下がりのケズリが認められる部分と、丁寧にナデられている部分がある。内面は口縁付近では丁寧にナデられている。より下方は、強いナデで、擦痕が認められる。4は甕で、胴部は比較的丸味を帯びる。底部を欠くが、最大径は胴部中位にあると思われる。頸胴接合部及び口縁内側に円形の刺突列が巡る。おそらく、先端の一部が欠損した丸棒状工具を使用したであろう。刺突部はCの字を呈している。内外面とも水平方向のナデにより調整されているが、頸部外面は条線が明瞭である。5～9は底部である。このうち8は、内外面共にミガキが加えられているところから甕と思われ、他は壺と思われる。7、9は外面のみに弱いミガキが認められる。10～14は破片資料である。10は鉢で折り返し口縁の外面に、2段の羽状縄文が巡る。口縁端は丸くおさめられているが、ここにも縄文が加えられている。判然としないが、単節LRのように見える。11は壺の口縁部で、水平方向に外反するものであろう。垂直に近い口縁端外面には単節LRが巡り、下端には、丸棒状工具によるキザミが巡る。その内側には、指頭による押圧が加えられている。内面及びこの押圧のある部分に赤彩が認められる。12は甕あるいは広口壺の口縁部である。口縁は外方に開くが、口縁端はわずかに面を形成し外傾気味である。折り返し風の口縁であるが、粘土紐をはり付けたと見られる。下端にはキザミが巡る。原体は不明だが、垂直方向の条線が見られる。外面口縁下は水平方向の調整痕が見られるが、より下位では、それは認められない。ただし、キザミの部分に隠れて、垂直方向の調整痕が見える。内面は口縁直下に水平方向のハケメ風の調整痕が見られるが、全体にナデを加えられている。13は壺の胴部であろう。単節RLの斜縄文の上に2条一単位の回転結節文が、2cm程の間隔をおいて2単位施文されている。いずれも、上方が結節文S、下方が結節文Zである。なお、内面はナデられている。14は折り返し口縁の壺であろう。口縁端は残存部分が少ないが、丸くおさめられており、施文はない。内外面共、水平方向にナデられている。なお、図示していないが、口縁部直上に比較的密にキザミを加えた甕の破片が出土している。



第5図 202号住居跡

202号住居跡（第5図）

201住居跡の西方約14mの部分で検出された。住居跡全体の約1/3に相当する部分で、浅く壁の立ち上がりが確認された。残存部分から推測すると、本来の形状はいびつな小判形といったところであろう。プラン内には柱穴は確認されなかったが、壁に沿うようにP1～P5までの5個のピットが検出されている。炉は、住居中央よりやや南西に寄った部分で検出されている。P2、P5の中間にあたる地点である。なお、北東側は104方形周溝墓により、南東の一部は103方形周溝墓により切られている。炉は2ヶ所検出されている。床面中央寄りの正円に近いものと、南西側に隣接する楕円形を呈するものである。調査時の所見では、中央寄りのものが古いとされている。この古い炉は床面より5cm下がったところに火床がある。なお、焼土を掘り込んだピットが検出されている。新しい方の炉は床面



第6図 201(1~14)・202(15)出土遺物

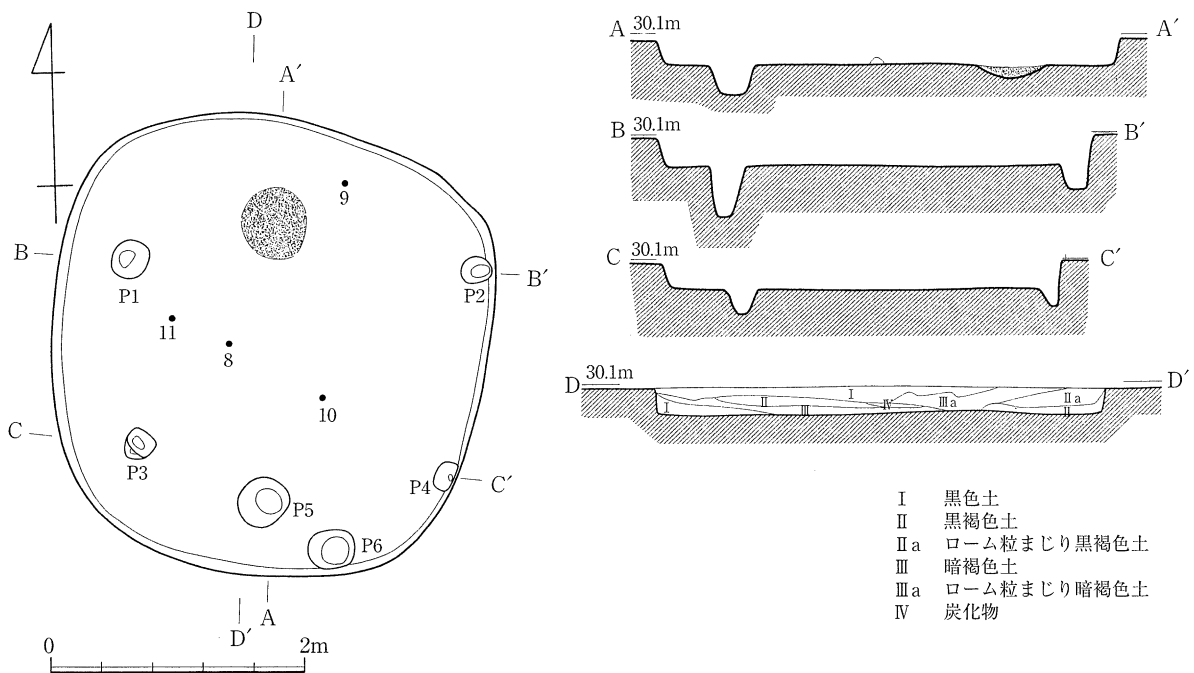
より6cm下がった部分に火床があり、古い炉よりも焼けているとの所見がある。

遺構の遺存状態が良好ではなかったため、図示しうる遺物は、土製の紡錘車一点である(第6図15)。円錐台形を呈し、下面で直径6.1cm、上面で4.1~4.3cm、厚さは1.5cmである。重量は52.6gで、直径7mmの焼成前の穿孔がある。

203号住居跡(第7図)

201住居跡の北西約10mの部分に位置する。主軸を北西方向にもち小判形の形状を示す。長軸約7.8m、短軸約6.6mである。南東の長辺の一部および南西の長辺の一部は、104方形周溝墓により切られているが、この周溝の北辺の掘り込みが浅かったことにより、本住居跡の底面にはほとんど影響を及ぼしていない。北西部分は攪乱により欠失している。北東側にも浅い溝状の遺構があるが、壁をわずかに切る程度で、大きな影響を受けずに済んでいる。床面には炭化材が散乱し、床面も赤化していることが確認されている。床面では十数個のピットが検出されているが、このうちP1~P4が主柱穴であろう。P5は入り口ピットかもしれない。P1P2、P3P4、P1P3、P2P4の柱穴間は、3.9m前後で、正方形に近い柱の配置である。炉はP1P2のほぼ中間で検出されている。

遺物は第9図1～7に示したものが出土している。1はやや大型の壺である。口縁部と胴部は接合しないが、同一個体と判断した。頸部から胴部にかけての外形線は推定線で、頸部の屈曲の度合いについては、不確実な部分がある。口縁は二重口縁風で、大きく外反する端部に、外傾する口縁が付けられている。口縁外面は中央の結節文をはさんで、上下に縄文が施文されている。また、4個一組の棒状付文があり、付文上には浅いキザミが加えられている。胴部上半から胴中位の最大径のある部分よりやや下がったところまでは文様で満たされている。文様は上位から回転結節文、2段の羽状縄文、回転結節文、ヘラ描きの連続山形文、回転結節文、最下位はいわゆる幾何学文様である。上位の連続山形文および、下位の幾何学文様内は縄文が見られるが、ともに羽状縄文がベースになっている。連続山形文部分は2段、幾何学文様部分は5～6段の羽状縄文である。連続山形文の外側部分、幾何学文様の菱形部分は、縄文がすり消され、赤彩されている。外面胴部下半は水平方向のミガキ、底部近くは垂直方向のミガキ、内面はナデである。なお、上記のうち回転結節文については、詳細は判然としない。通有の結節文とは異なる印象がある。2は素口縁の鉢である。口唇部は面取りされて幅の狭い平坦面がある。内外面とも水平方向のナデが施されている。3は甕で、頸胴接合部に一段の輪積み痕を残す。口縁端を欠くが、最大径は胴部にあると思われる。頸部はやや外反するが、垂直に近く、胴部はやや丸味を帯びる。頸胴接合部にはキザミが巡る。水平方向の条線が明瞭であるが、原体は不詳である。外面は水平方向のナデ、内面は水平方向の弱いミガキが施される。4は壺で、口縁を欠く。胴部から頸部にかけては、曲線的に立ち上がる。胴下半は直線的に開き、やや外反気味の1とは異なる。胴部上半は、上から結節文Z、羽状縄文、結節文Zが施文される。施文は、全体に押捺が弱いいためか不鮮明な部分がある。結節文Zは、単位は見出せず、一条ずつ施文しているように見える。図示した中で、下方の結節文は、1条と2条とに分かれているが、これを左の方に追いかけてみると、3条が近接してしまっている。1条ずつの施文であったため、次第にズレが拡大したのであろう。結節文間は羽状縄文で満たされているが、5段で構成されている。最上段の単節RLから始まり、以降



第8図 204号住居跡

LR、RLを交互に施文し、最下段はRLである。このうちLRの部分は条の間隔がやや大きく、附加条の可能性がある。赤彩は全体的に不明瞭であるが比較的明瞭に残っている部分で見ると、底部から数cm上方は赤彩されず、その上方の無文の部分に赤彩されるように見える。整形は、内面はナデと思われるが、全体に不明瞭である。外面は胴中位から底部にかけて、水平方向のミガキ、左傾したミガキ、垂直方向のナデとなっている。5はやや小振りの無文の鉢である。口縁端は丸くおさめられ、内外面共水平方向を基調とするミガキが施されている。6、7は石器で、6は安山岩製の敲き石で、周縁に敲打痕がある。また、両面の平坦面の中央には浅いくぼみ状の部分がある。周囲よりは表面が荒れている。敲打痕であろう。7は砂岩製の磨り石である。表面は全体に平滑である。周縁の一部はざらついている。敲打痕であろう。

204号住居跡（第8図）

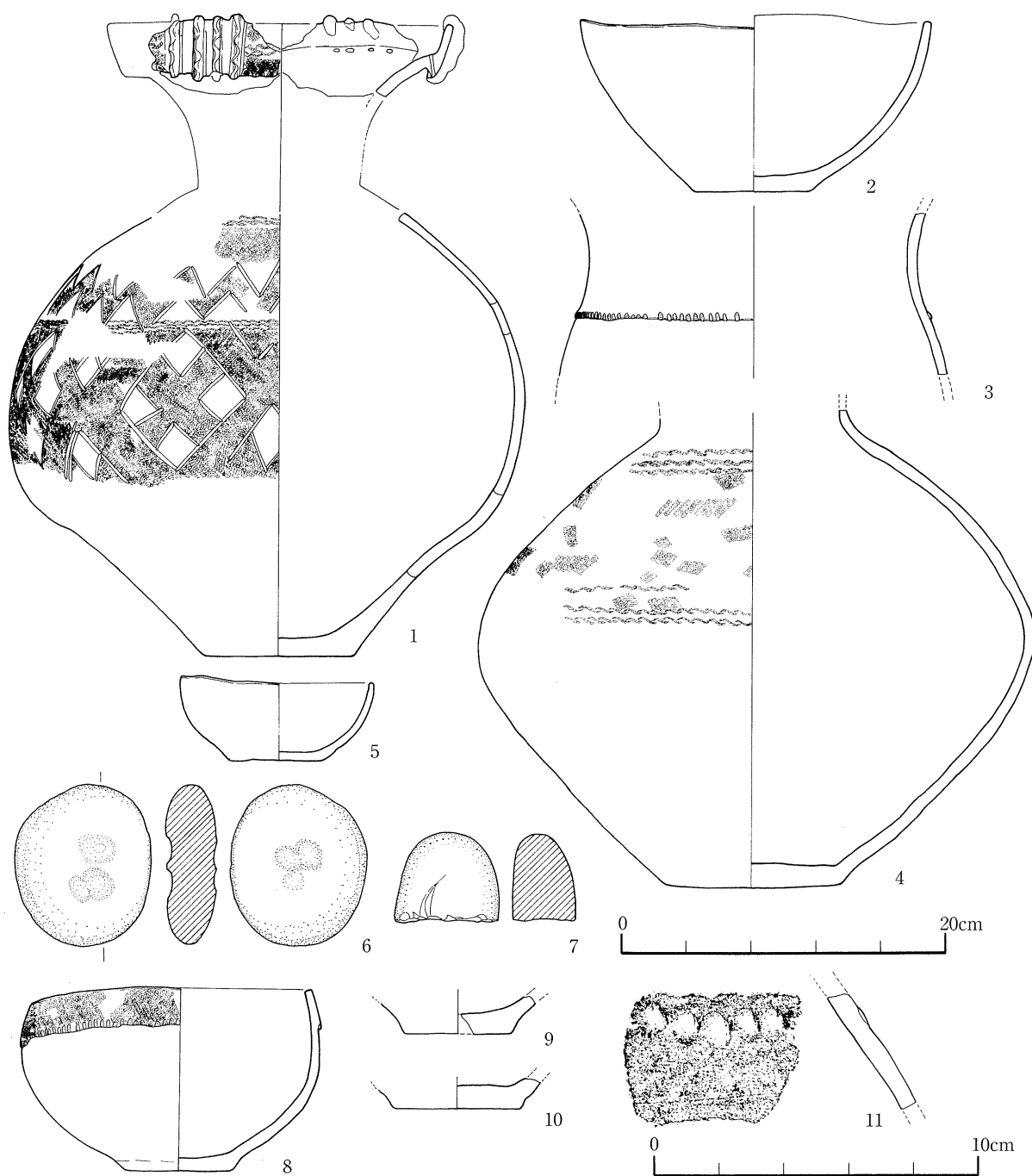
調査区中央よりやや北西寄りで検出された。主軸をほぼ北に持ち、長軸約3.7m、短軸約3.4mの歪んだ方形を呈する。ピットは6箇所検出されている。P1～P4は支柱穴、P5は入り口ピット。P6は貯蔵穴だろうか。柱穴間はP1～P2が2.8m、P3～P4間が2.5m、P1～P3間が1.5m、P2～P4間が1.6mで床面上での柱の配置は不整な方形である。梁行を長くしている点では、201住居跡に類似する。炉はP1P3の中点よりやや北に寄った部分で検出されている。炉は焼土の堆積はほとんどなく、床面より最大約5cmくぼんで火床がある。火床の下は5cm程下まで受熱して赤化している。

遺物は第9図8～11に示したものが出土している。8は折り返し口縁の鉢で、口縁は内湾してわずかにすぼまり、最大径は胴部上半にある。器形全体は壺の下半部のようなものである。口縁外面は羽状縄文が巡り、折り返し部下端には縄文原体によると思われるキザミが巡る。口唇部は平坦で単節LRが施文されている。口縁部には、直径7mmの焼成前の穿孔がある。内外面共器表は荒れ気味だが、水平方向のナデが認められる。9、10は底部破片である。全体の器形は不明であるが、9は内面が黒褐色を呈し、有機物が炭化したと見られ、煮沸具と見られる。なお、両者とも調整痕は不明瞭である。11の破片資料は甕の胴部で、一段の輪積み痕を残すものであろう。この頸胴接合部に指頭押圧による浅い楕円状の文様が巡る。この楕円状の文様の右端に一条の条線があるが、爪跡と見られる。

205号住居跡（第10図）

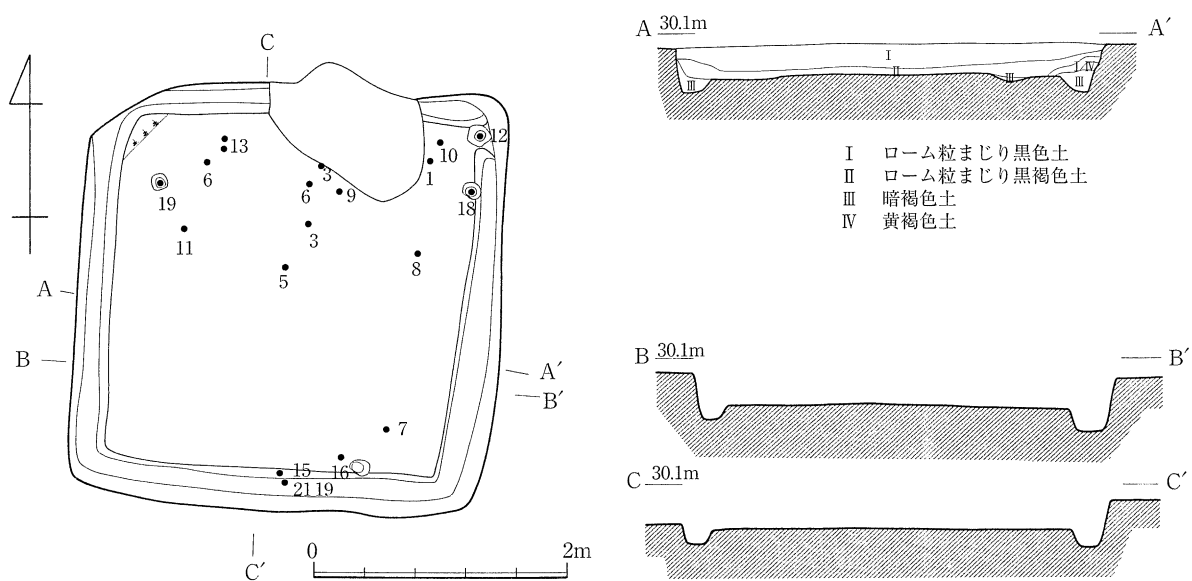
調査区の北端に近い部分で検出された。北に近い方向に主軸を持つ。縦軸は3.40m、横軸は3.36m。南北にやや長いが、ほぼ正方形と見てよいであろう。北西角は、上方が削平されている。壁に沿って、幅約20cmの周溝が巡っているが、北東角で、途切れている。柱穴と思われるピットは検出されていない。カマドは北辺の中央よりやや東に寄った部分で確認されている。

遺物は図示したようなものが出土されている。（第11図）。1～9は土師器の甕である。1はやや小振りで、頸部はゆるく「く」の字状に屈曲する。最大径は、胴部中位よりやや上にある。頸部は内外面共水平方向にナデられ、胴部は、外面は上から約2/3の部分は、垂直あるいはやや左傾したケズリで、下位は水平もしくは左下がりのケズリである。内面はやや右下がりのナデである。底部外面は不整方向にケズリが行われており、その上にやや太い線刻で「×」印が焼成前に付けられている。2はやや大振りだが、器壁は部位によっては3mmでむしろ薄い。頸部は「く」の字状に屈曲し、外面口縁端部は直立気味で狭く面取りされている。外面の整形は口縁部が水平ナデ、胴部が垂直方向のケズリである。内面は残存部ではいずれも水平方向のナデである。なお、胴部外面には輪積みの痕跡と見

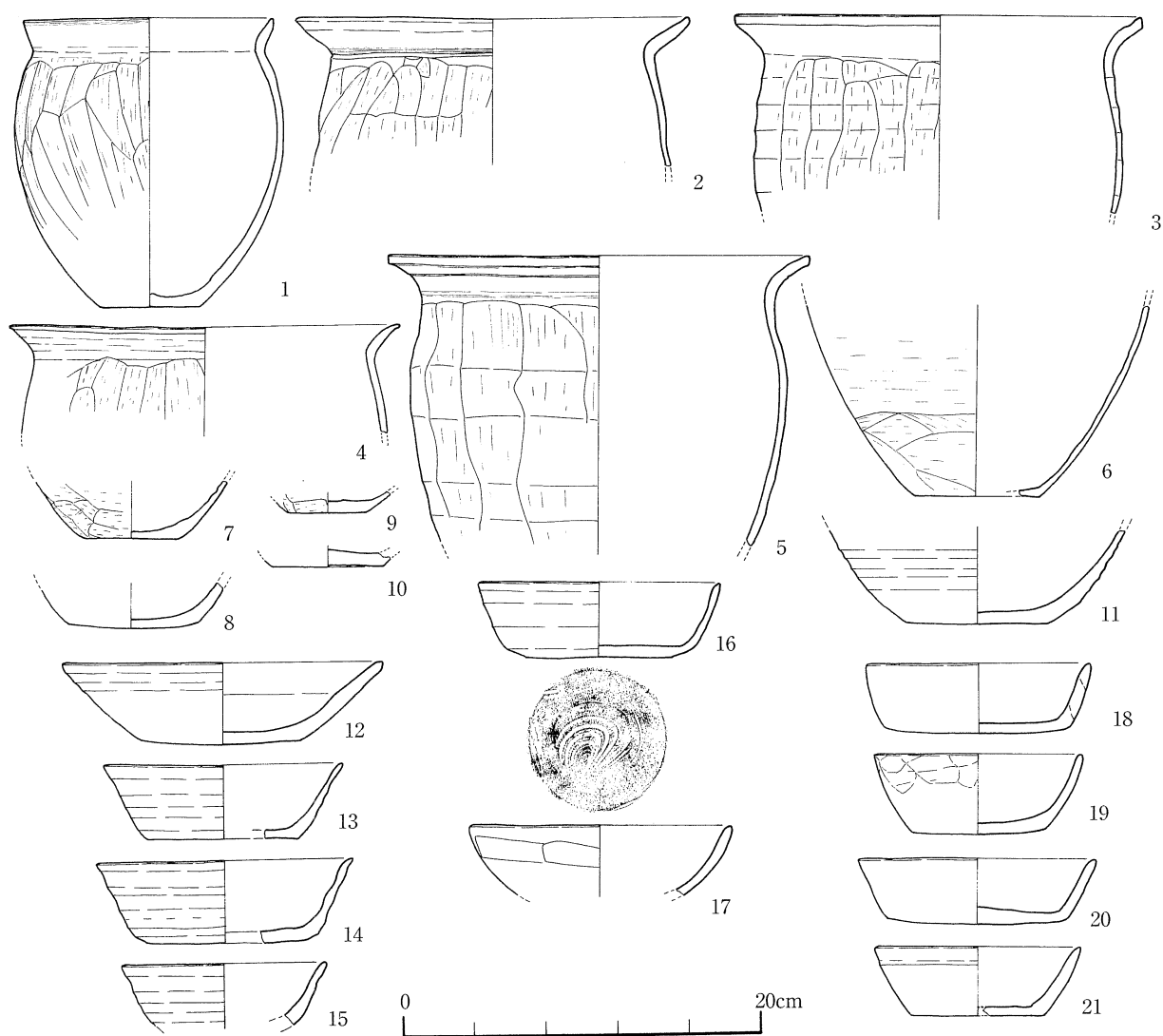


第9図 203(1~7)・204(8~10)出土遺物

られる凹凸が残っている。3は法量的には2に近い。直立気味の胴部から、大きく曲線を描いて口縁部にいたる。口縁端外面は面取りされ、直立する。最大径は口縁部にあると見られる。内面および口縁外面は水平方向のナデで胴部外面は垂直方向のケズリである。輪積みの痕跡の凹凸を胴部外面に残している。頸部にも輪積みの痕跡と見られる沈線状の部分がある。4は口縁端部が丸く作られる点で、2、3とは異なるものである。他の整形等では大きく異なる点はない。5は口縁外面の面取り、頸部の輪積み痕が3と非常に類似しており、同一個体の可能性がある。6は底部から胴部にかけての部分で、外面は水平方向を基調とするケズリで占められている。内面は、水平ないし右下がりのナデでハ



第10図 205号住居跡



第11図 205出土遺物

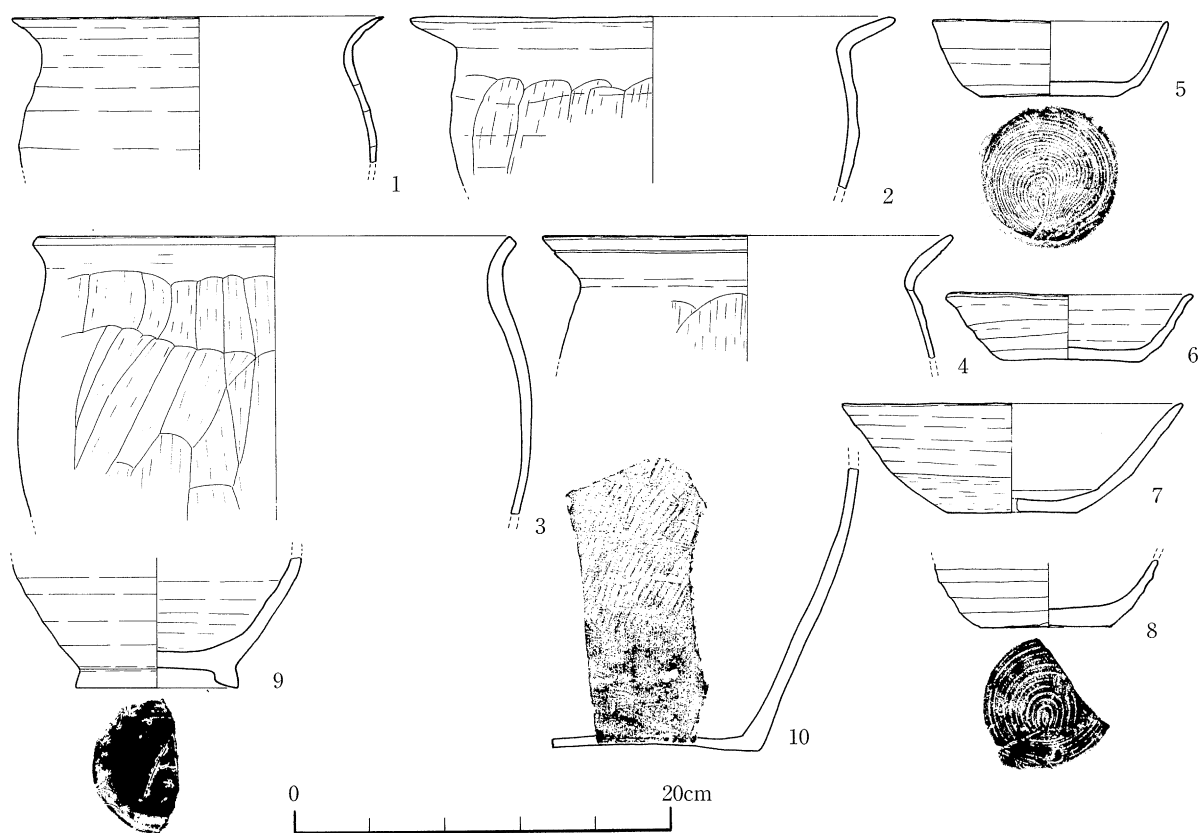
ケ状の条線が認められる。胎土中の砂粒が他の甕より多い印象を受ける。7～9は底部の資料である。7は底径は1に近い。胴部外面は水平方向を基調とする小刻みなケズリが加えられている。底部は弦方向の単一方向のケズリが認められる。内面はナデと見られるが、方向等判然としない。8は他と比べ、器壁がやや厚く、内面は丁寧にナデられている。胴部外面は水平方向のケズリ、底部外面は、不整方向のケズリである。底部内面にはススの付着がある。9は小型品の底部であろう。内面のナデはやや雑で、凹凸が顕著である。外面は、胴部は水平方向のケズリ、底部は不整方向のケズリである。10以下は坏類である。10はほとんど底部のみの破片である。外面は比較的平坦であるが、内面はやや凸である。外面は不整方向にケズリが行われており、内面は弧方向にナデられている。11、12は内黒土器でやや大振りである。11の体部はゆるい曲線を描いている。底部は不鮮明だが、回転ヘラケズリされているように見える。体部下端も回転ヘラケズリされ、より上位はヨコナデである。内面は水平方向にミガキが行われている。底部外面には「三」字状の線刻がある。焼成後に描かれたとみられる。いずれも切り込みは狭く浅い。12は、11よりも直線的に外方に開く器形である。器壁も厚く重量感がある。内面はミガキが加えられているが、その方向は不明瞭である。外面口縁直下は水平方向のナデが認められ、より下位の部分は水平方向のミガキである。底部外面もミガキが施されている。13は須恵器で、体部下端がヘラケズリされる。底部外面は不整方向のヘラケズリである。内面はヨコナデされている。胎土中には白色粒子を多く含む。色調は暗灰色で、千葉市域の製品と思われる。14はロクロ土師器で、暗赤褐色を呈する。体部にはロクロ目を残す。底部は遺存部分が少なく、整形は判然としない。体部下端に稜線が形成されており、ヘラケズリが加えられている可能性がある。胎土中白色の微粒子がやや目立つ。15はロクロ土師器で、外面でロクロ目が顕著で、凹凸が目立つ。16は須恵器で底部中央に回転糸切り痕を残し、その外周は回転ヘラケズリされている。それ以外の部分はヨコナデである。内外面共に薄い火襷が見える。市原市域（永田・不入窯、あるいは石川窯）の製品と思われる。17は体部が曲線的に開く坏で、底部を欠くが、丸底風の器形になると思われる。外面は全面がやや右下がりのケズリが加えられ、内面は水平方向のナデである。この住居跡の出土遺物の中では古相を示すものである。18は体部が直立気味のロクロ土師器である。底部外面は全面回転ヘラケズリされており切り離し痕は見えない。他はヨコナデされている。19は体部が曲線的にゆるく立ち上がる坏である。外面は水平方向を基調とする小刻みなケズリが施されるが、口縁付近のみに水平方向のナデの痕跡の条線が見える。底部外面は不整方向のケズリである。内面は水平方向のナデであるが、甕の内面で見られるような工具痕が認められる。甕の技法で坏を作ったような印象を与える。前掲8も、本例のような坏かも知れない。20はロクロ土師器で、18に近い形態を示すが、体部が外傾気味である。底部は全面回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。底部の内面中央はやや凸になっている。なお、口縁内面は内傾気味である。21は体部が直線にわずかに外方に開く土師器である。外面口縁下1cm位の部分までが水平のナデ、以下の部分は水平方向の小刻みなケズリが加えられている。底部外面は不整方向のケズリのように見える。内面は水平方向のナデである。

206号住居跡（第12図）

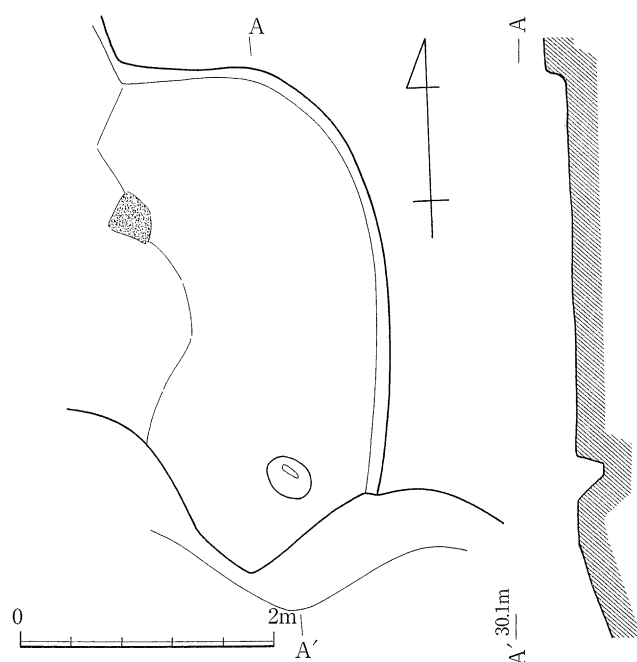
調査区中央よりやや西寄りで検出された。205住居跡とは約20m離れている。主軸は北より若干西に振れる。1辺約3mの正方形に近いが、各辺若干の長短があり、やや歪んでいる。柱穴は検出されなかった。北東角および南辺中央で床面からの深さ約20cmの浅い掘り込みがある。壁に沿って周溝

が検出されているがカマドの東側部分では検出されなかった。カマドは、北辺のほぼ中央に設けられている。205と比べて外側へ大きくはみ出し、煙道も長い形態のものであったと見られる。

遺物は図示したようなものが出土している（第13図）。1～4は土師器の甕である。1は頸部が曲線的に屈曲するもので、最大径は胴部にあると思われる。口縁端部は丸く収められている。内面は水平方向のナデ、外面は、口縁部は水平方向のナデ、胴部は垂直方向のケズリで、胴部外面は凹凸が目立つ。2は1に比べ、頸部の屈曲が強い。最大径は、口縁部にあると見られる。口縁は直線的に外方に開き、口縁端は直立気味だが丸味を帯び、面取りされて平坦という形状ではない。外面頸部の屈曲部から1 cm ほど下がった部分以下は、垂直方向のケズリが見られる。それ以外の部分は水平方向のナデである。3は頸部の屈曲が弱く、口縁が短く外方に開くものである。最大径は胴部にあるが、口径とはあまり差はないであろう。口縁端は面取りされ外傾している。外面は屈曲部を境に上方は、水平方向のナデ、下方はケズリが加えられる。屈曲部直下では垂直方向のケズリだが、やや下位の部分では右傾したケズリとなっている。内面は口縁部から4 cm 位の個所まで、水平方向のナデで、条線が目立つ。より以下の部分も水平方向のナデと思われるが、条線は明瞭ではない。上位の部分との境には、稜線が形成されている。この稜線の位置は、外面の頸部の屈曲部よりも2 cm 程下位である。4は形態的には1に近い。頸部は曲線的に屈曲し、口縁は直線的に外方に開く。口縁端は丸く作られている。口縁直下に、輪積みの痕跡と見られる沈線状の部分がある。同様の特徴は、205住居跡の3でも認められている。口縁外面及び内面は水平方向のナデ、胴部外面は垂直方向のケズリである。5～8は坏類である。5は須恵器で、体部は直線的にわずかに外方に開く。底部は回転糸切り無調整で、それ以外はヨコナデである。内外面にわずかに火襷が認められる。市原市域産であろう。6はロクロ土師器で、体部は外方に開き、口縁はわずかに外反する。外面はややロクロ目がきつい。底部外面は不整方向にケズリが加えられ、切り離し痕は見られない。体部下端の幅5 mm 程の部分には、水平方向のケズリが見られる。他の部分はヨコナデである。7はやや大振りの内黒土器である。体部は直線的に外方に開く。底部外面は全面回転ヘラケズリされている。外面体部下半4 cm 弱の範囲も回転ヘラケズリで、より上位はヨコナデである。内面は水平方向を基調とするミガキが加えられている。8はロクロ土師器で、外面のロクロ目がややきつい。底部は回転糸切り無調整である。体部外面下端幅1 cm 位を回転ヘラケズリしており、他は、ヨコナデである。底部内面に浅く「×」印の線刻がある。9は須恵器の瓶である。比較的しっかりした、やや外方に開く高台がつく。外面は、えび茶色とでも言うべき色調である。底部外面に回転糸切り痕が見え、焼成前の線刻がある。欠損しているので、全形は不明であるが、残存部分は「く」状である。窯印であろうか。胴部下端、幅2 cm 程の範囲が、回転ヘラケズリされ、それ以外の部分はヨコナデである。外面に比べ、内面のロクロ目がきつい。内面底部付近に降灰が見られ、外面に近い色調を呈している。10は須恵器の甕の下半部で、底部から比較的直線的に外方に開いているが、破片上方ではわずかに内湾し始めている。胴部外面下端幅6 cm 程の範囲はやや右下がりに小刻みにケズリが行われている。上方はやや右傾したタタキを残している。このタタキを横切るように水平方向の浅い沈線が通っているが、遺存部分が少なく、文様とは断定し難い。内面は、外面の整形に対応するように、下半ではやや左下がりのナデが加えられ、この部分は条線が明瞭で、上位は明瞭な工具痕を残さない。底部は残存部分が少なく整形は不明である。形態や技法から見て千葉市域の製品であろう。



第13図 206出土遺物



第14図 208号住居跡

208号住居跡（第14図）

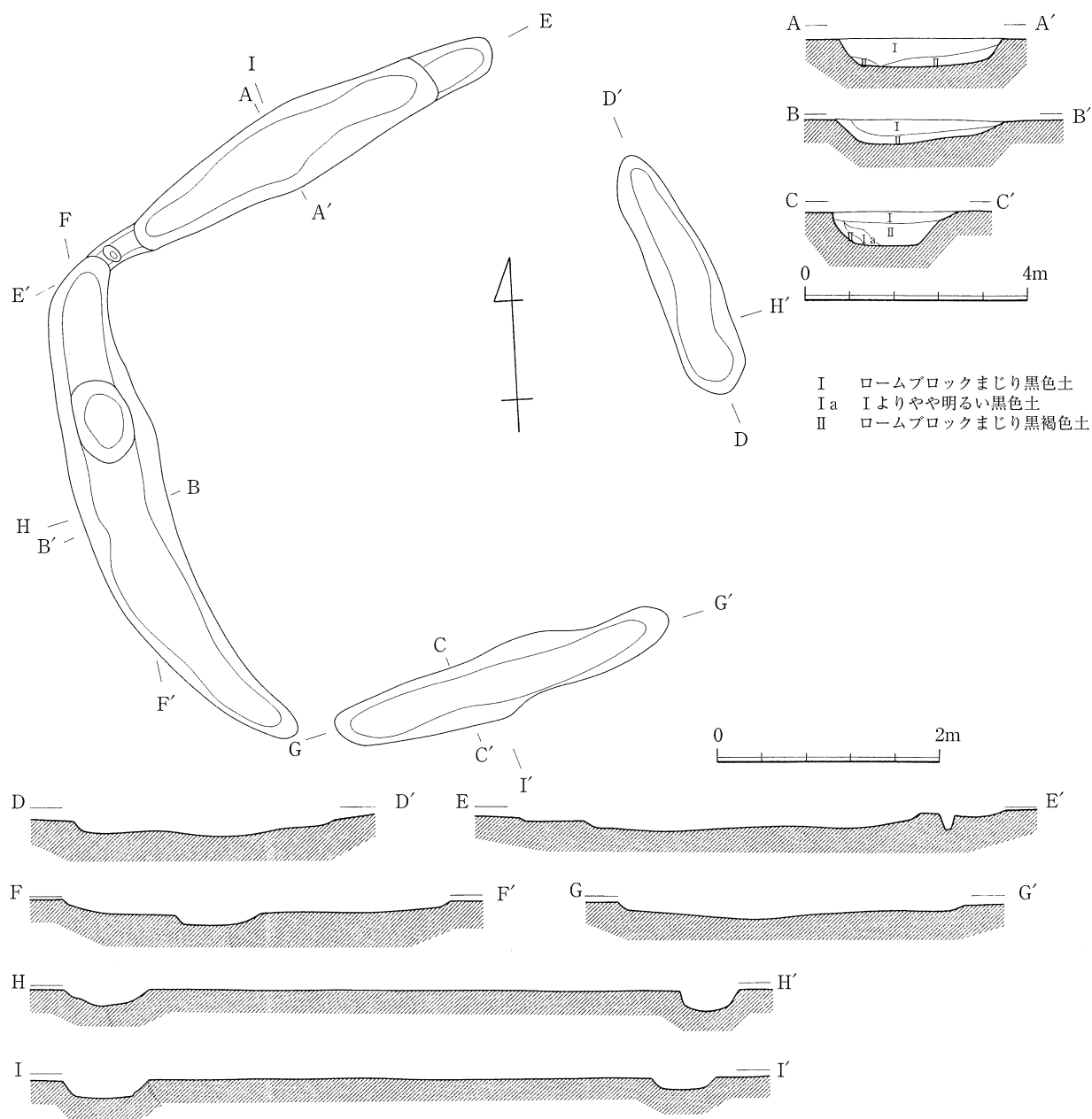
調査区の北辺の中央よりやや東に寄った部分で検出された。西側および南側が攪乱を受けており北から東にかけての壁が捉えられたに留まる。図中破線の範囲は床の確認された部分である。炉の位置および南東で検出されたピット、床の残存範囲等から考えると、主軸方位をほぼ北にもち、南北4.2m 前後、東西4 m 前後の、やや南北に長い小判形といった平面形を有していたと推測される。

図示しうる遺物の出土はなかった。

(2) 方形周溝墓

101号方形周溝墓（第15図）

調査区東コーナー近くで検出された。周溝は全周せず、北東溝、南東溝が独立し、北西溝、南西溝は、やや浅い溝により接続されている。北東溝は約4.6m、南東溝は約6 m、北西溝は6 m、南西溝は約9 mである。各溝の最大幅は1.2m～1.6mの範囲に収まる。それぞれの溝は中央で最も深く、確認面から約30cm、両端では10cm 前後となって

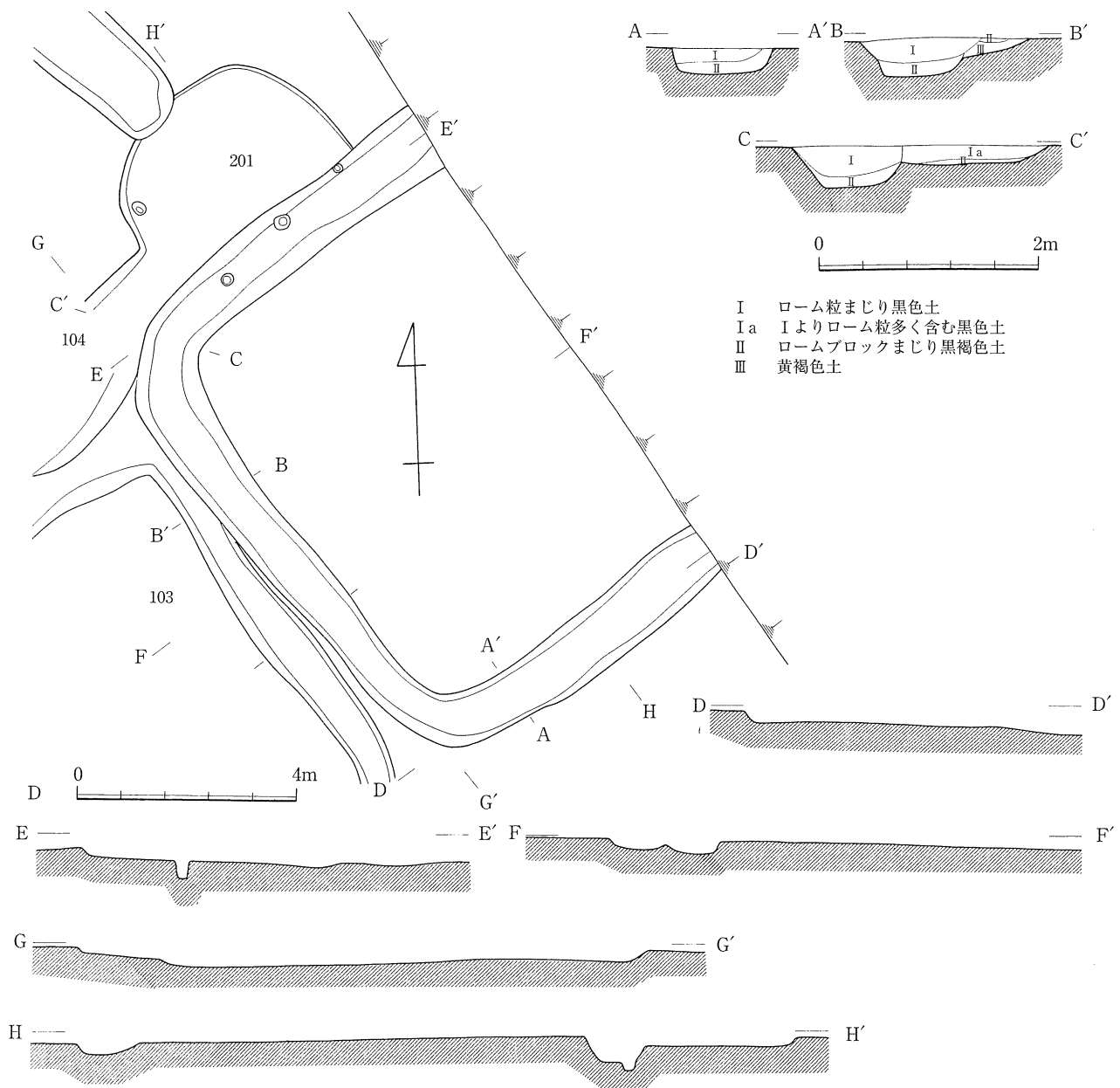


第15図 101号方形周溝墓（水準線はいずれも30.1m）

いる。北西溝は、東端では段状を呈している。南西溝のみが長く、弧を描いており、中央より北寄りの部分に、長軸1.6m、短軸1mの楕円形の落ち込みがある。この部分の深さは、溝底より10cm前後下がる程度である。この方形周溝墓全体では、一辺約12mの方形範囲、約150m²を占めている。主体部は検出されず、図示しうる遺物の出土もなかった。

102号方形周溝墓（第16図）

調査区東辺のほぼ中央で検出された。101号方形周溝墓とは約12m離れている。東側約1/3は調査区外に及んでいる。西側で、103号方形周溝墓と接し、北側では104号方形周溝墓と接し、既述の201号住居跡を切っている。土層断面は、102が、103、104よりも新しいことを示している。周溝は全周すると思われる、外寸で1辺約10mの方形といったところであろう。周溝の幅は0.9m～1.2mで、広狭のバラツ

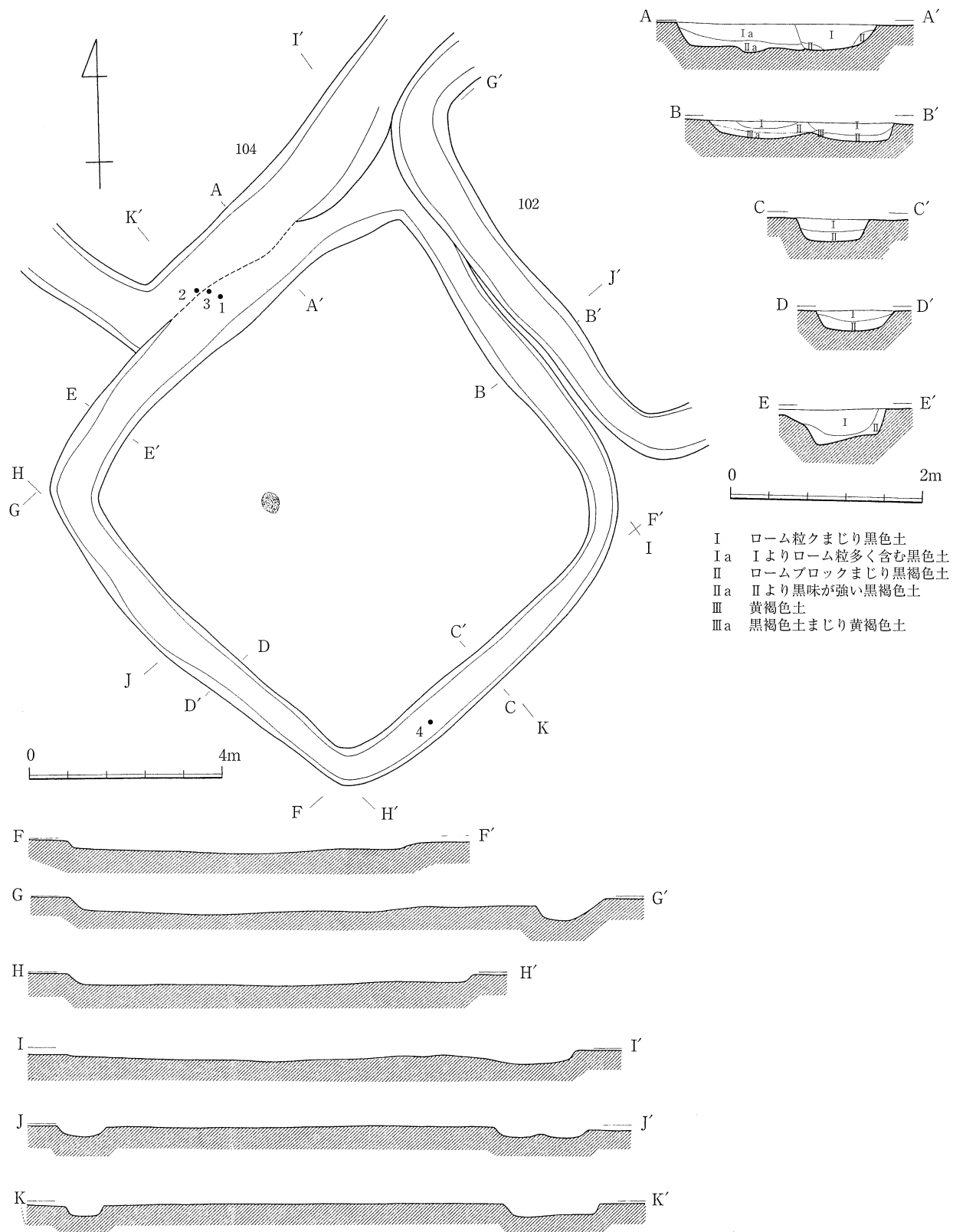


第16図 102号方形周溝墓 (水準線はいずれも30.1m)

きはあまりないように見える。確認面からの深さは、北西辺中央で約50cm、南西辺、南東辺の中央では約20cmと、北西辺の深さがやや目立つ。なお、底面の標高値で見ると、南コーナー部分が最も高く、次第に、北ないし東へ低くなっていく傾向が認められる。全体を把握できていないが、各辺の中央部が深くなるわけではないように見える。主体部は検出されず、図示しうる遺物の出土もなかった。

103号方形周溝墓 (第17図)

調査区のほぼ中央で検出された。東側に102、北側で104が接する。102との関係は、既述のように、103の方が古く、104との関係については、やはり土層断面は104の方が古い。よって、3者の関係は、104→103→102という順序が与えられる。周溝は全周し、一辺約10mの歪んだ正方形といった形態で



第17図 103号方形周溝墓 (水準線はいずれも30.1m)

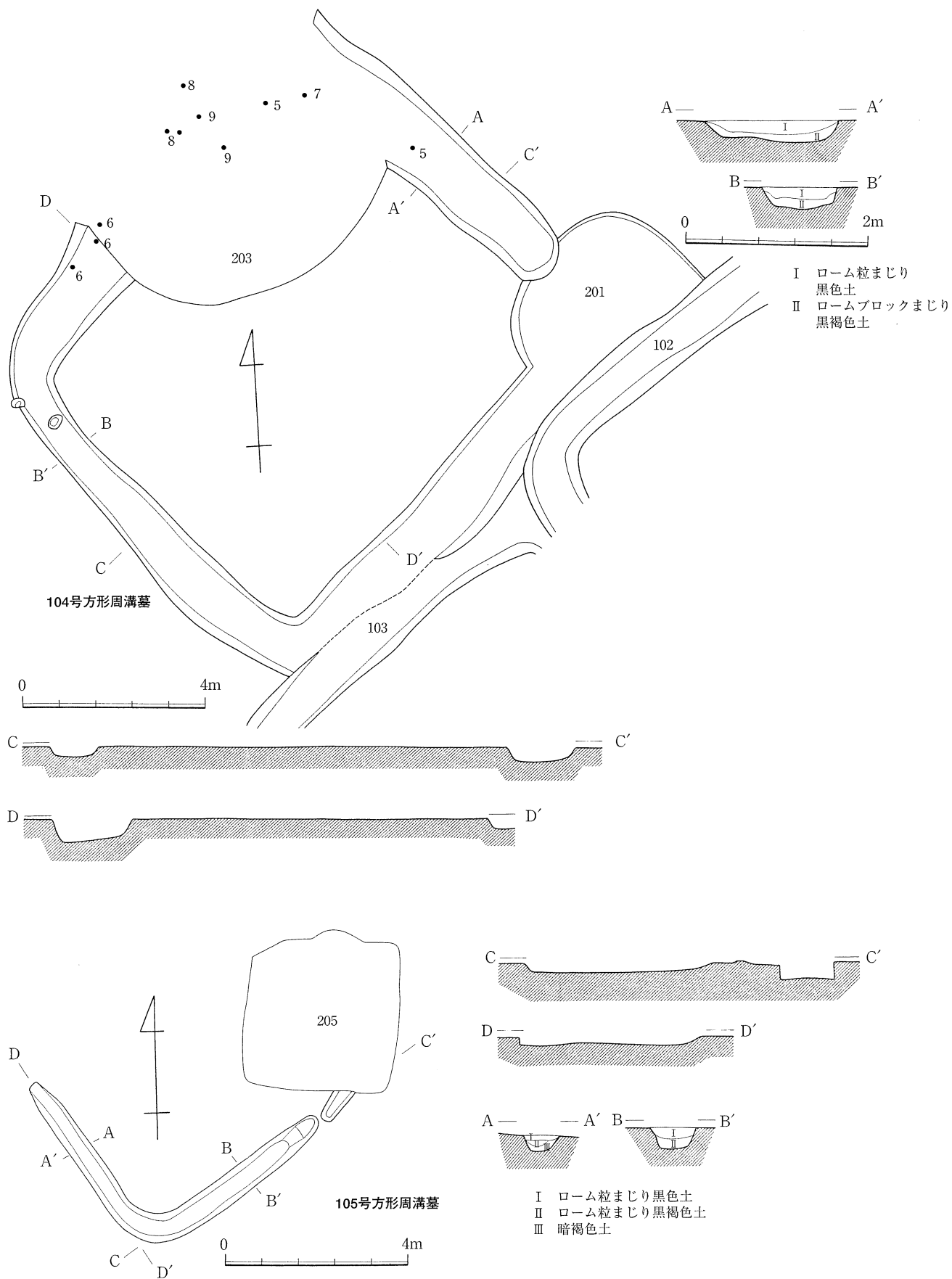
ある。南東および南西の辺は比較的直線的だが、北東および北西の辺はやや波うっているように見える。また東コーナーのみ丸味が強い感がある。周溝幅は0.7m から 1 m といったところで、断面形は逆台形といってよいであろう。確認面からの深さは、各辺中央部で深い傾向があつて、それでも20cm 前後、各コーナー付近は相対的に浅く10cm 前後である。深いところと浅いところの差といっても10cm を前後する程度である。

遺物は図示したようなものが出土している（第19図 1～4）。土器は北西辺の中央部でまとまって出土している。1 は埴形高坏で脚端部が大きく外方に開く。坏部は、下半ではやや曲線的だが、上半では直線的に外方に開く。口唇部は面取りされている。内面は垂直方向のミガキ、外面は右下がりのミガキである。脚部には、焼成前の穿孔が4 個巡る。穿孔の直径は、1.1cm である。脚端は、面取りされ、幅2～3 mm の垂直な面が形成されている。外面は垂直方向にミガキが施され、内面は、穿孔部より1 cm 程上の部分まで、水平方向のミガキが行われている。2 は有稜高坏である。坏部は、直線的に外方に開くが、口縁端でわずかに直立気味となる。脚は、坏との接合部より1 cm 程低い部分で、最小径となる。直線的に外方に開くが、端部近くでわずかに反り気味となる。焼成前の穿孔が3 個所ある。この穿孔のあるあたりで、脚部は若干膨らみ気味だが、顕著なものではない。脚端のせまい部分は面取りされている。整形は坏部内面では、口縁直下は水平方向のナデ、以下の部分は垂直方向のナデ、外面は口縁直下は水平方向のナデ、体部の広い範囲は左傾したナデ、下端は水平方向のナデである。外面口縁直下のナデでは、条線を明瞭に残すが、他の部位では不明瞭である。脚部外面上半は、垂直方向のミガキ、端部から幅1.5cm 程の範囲は水平方向のミガキであるが、ミガキは概して弱い。内面上半は、水平方向を基調とするハケ、下半は水平方向のナデで条線が明瞭である。3 は小型の甕である。平底で、最大径は口縁部にある。わずかに屈曲した頸部から、口縁部にかけてやや外方に開く。口縁端部の作りはやや雑で、丸く作られている部分や、面取りされている部分がある。内面はほぼ全面で水平方向にミガキが見られる。外面も水平方向のミガキが広い範囲で見られるが、右下がりの部分もある。なお、口縁内面に水平方向のハケ、口縁外面に垂直方向のハケがわずかに認められる。4 は磨製石斧の基部である。砂岩製だが、正面はかなり平滑で、光沢がある。

104号方形周溝墓（第18図）

調査区中央やや北寄りで検出された。隣接する遺構との切り合い関係が多いが、201、203住居跡よりは新しく、102、103方形周溝墓よりは古いと考えられる。全体に遺存状況は悪いが、長軸約12m、短軸約11m である。北東辺の南端は201住居跡の床面の一部を切っている。南東辺の北端では201住居跡の床面に影響を及ぼしていない。住居跡とほぼ同レベルか、より高位であったと考えられる。北東辺の南部と直接接する可能性は少ないと考えておきたい。よって、周溝は全周せず、少なくとも東コーナーで途切れることとなる。北コーナーについては、203住居跡の掘り込みが深く本来の形態を推測するのは困難である。周溝幅は1.3m～1.5m で、北西辺の203と重複するあたりではやや広くなる気配を見せている。周溝の深さは、北東辺および南東辺が、中央でやや深い傾向があるが、南西辺ではほぼ平坦である。主体部は検出されなかった。

遺物は図示したようなものが出土している（第19図 5～9）。5、6 は大型の壺である。5 の胴部は、球を上下に圧縮したような形状を示す。頸部は、鋭角的に屈曲し、やや外方に開く、頸部外面に垂直方向のハケメを残している。胴部最上位には、わずかに左傾したハケメを残すが、胴部の上方約



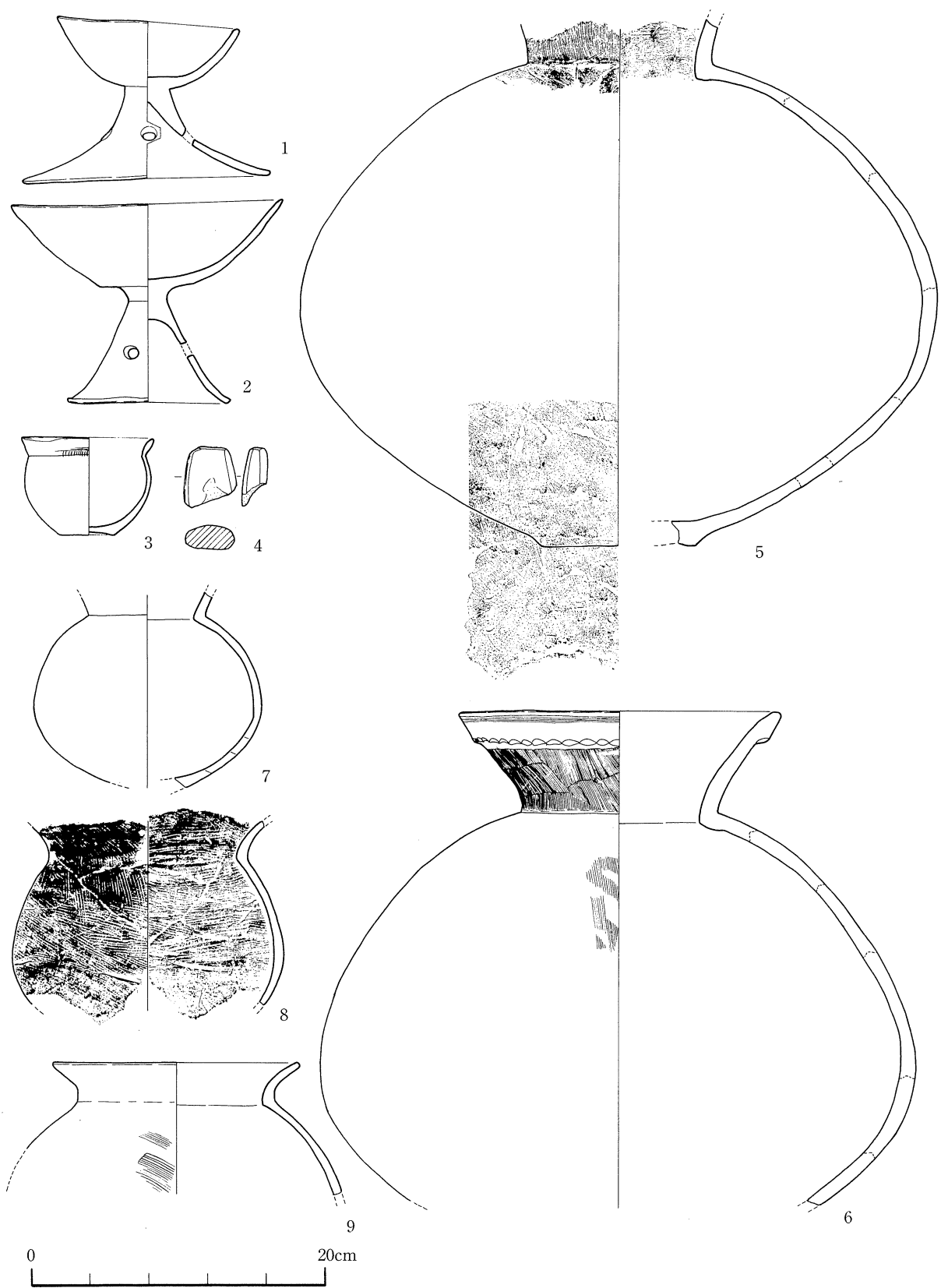
第18図 104号(上)、105号方形周溝墓 (水準線はいずれも30.1m)

2/3までは垂直方向の弱いミガキで覆われている。なお、一部に垂直方向のミガキが残存している。以下の部分は左傾したハケメである。内面は頸部では水平方向のハケメの目の上から、垂直方向のミガキを加えているが、ミガキの間隔がやや疎でハケメはかなり残っている。胴部は全面的に水平方向にナデられている。頸胴接合部については、頸部をあとから胴部に接合したのであろう、その際若干はみ出した部分を、胴部にナデつけたような痕跡がある。なお、底部は、ごく一部の残存に留まるが、雑な整形という印象をうける。6は法量的には5に近似する。底部までは残存しておらず、胴部の全体は把めないが、5に比べ、下膨れの感がある。頸部は、鋭角的に屈曲し、直線的に外方に開く。口縁は折り返し口縁で、折り返し部下端に単位の大いキザミが巡る。おそらく指頭押圧による施文でキザミという呼称は適当ではないかもしれない。口縁端部は面取りされ外傾している。整形は外面では、口縁は水平方向のナデ、頸部はやや左傾したハケ、胴部は垂直方向のハケの上から、右下がりを基調とするミガキが加えられている。内面は頸部では全体に水平方向のハケの上から、口縁下2cm程の範囲は水平方向のミガキ、下位は垂直方向のミガキが加えられる。胴部は水平方向のナデである。頸胴の接合部は5と同様に内から外へ粘土を押圧しているのが認められる。なお、口縁の折り返し部に、一部剥落した個所があり、そこには、垂直方向のハケが見える。折り返し部が頸部の整形後につけられたことがわかる。7は小型の壺である。頸部は鋭角的に屈曲し、直線は外方にのびるが、遺存部分は短い。胴部は丸味が強く、最大径は、ほぼ中位にある。底部を欠くが、意図的に打ち欠いたかどうかは判断し難い。整形は全体的に丁寧に行われており、かえって整形痕は不明瞭である。外面胴部上方でわずかに左傾したハケが見え、その上はナデられている。その他の部分もナデと見られる。内面は、胴部がほぼ完周するように接合されているので充分な観察はできない。ほとんどの部分が水平方向のナデだが、頸との接合部付近の幅2cm程の部分は異なる整形痕がある。水平方向のミガキに見えるが、判断し難い。頸部外面はナデと思われるが方向は不明瞭、内面は水平方向のナデである。8は、いわゆるハケ甕である。頸部はゆるい曲線を描いて外方に開く。内面の屈曲部には弱い稜線がある。内外面共広い範囲にハケメを残している。外面は頸部では左傾したハケ、胴部最上位は垂直を基調とするハケ、下位は水平ないし右下がりのハケである。内面は、最大径部分までは水平方向のハケを明瞭に残すが、下位は、器面が荒れ気味で不明瞭で不鮮明である。9はいわゆるナデ甕である。頸部外面は曲線を描いて直線的に外方に開き口縁に至る。屈曲部内面は、部分的に稜を形成しているが、概して曲線的である。整形は、口縁は内外共に水平方向のナデ、胴部は内外共にナデと見られるが、方向等不明である。口縁部は丸く作られるが、部分的に外傾面がある。外面頸胴接合部付近にわずかに左傾したハケメが見える。

なお、遺物の出土地点は図示した通りである。調査図面では、重複する203住居跡と同一図面中に、出土位置が表記されている。遺物の帰属関係については、現場の判断を尊重した。遺物はやや北方に拡散気味だが、周溝が広がっていたとの解釈に立てば、了解可能であろう。

105号方形周溝墓（第18図）

調査区北西端で検出された。北半は既に造成により消失している。また東コーナー付近は、205住居跡に切られており南コーナー付近のみの残存である。全体規模については確定しないが、南東辺が、205住居跡東壁以东では検出されていないところから、東壁以西で屈曲すると考えられる。途中の断絶部を含めた南東辺の長さは、6m～7mの中に収まると推測される。既述の4基に比べ、小規模と



第19図 103(1~4)、104(5~9)出土遺物

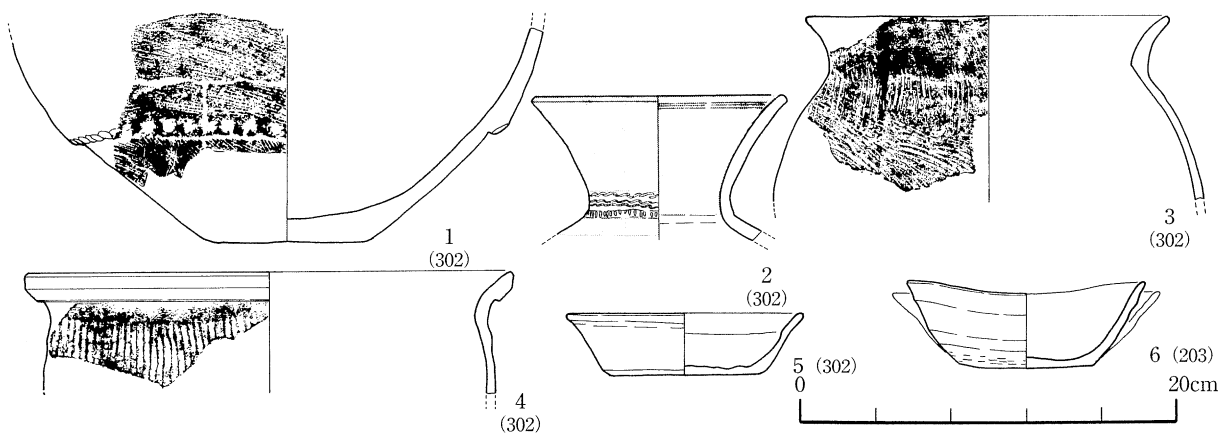
言える。平面規模の小ささと相まって、周溝幅も60cm 前後と、やや狭い。深さは、南コーナー、南西辺の残存部の北端で、15cm 前後、南東端中央で約20cm である。南東辺の断絶部は、わずかに10cm 程、途切れるのみで、周溝の深さも、数cm に留まっている。本来連続していたものが、コーナー近くであったため掘り込みが浅く、表土除去の際に、削平された可能性がある。主体部は検出されず、図示しうる遺物の出土はなかった。

(3) 旧石器時代・縄文時代の遺物 (第20図)

各遺構に伴うと判断された遺物以外に、混入と考えられる遺物がある。また、攪乱を受けた部分からの出土遺物がある。このうち、旧石器時代・縄文時代の遺物を以下に報告する。なお、各遺物番号の下に出土遺構番号を付す。このうち、302とあるのは、208住居跡を西方から南方を囲むような形で検出された不定形の落ち込みで、形態・出土遺物等から、後世の攪乱と判断し、報告しなかった遺構である。1はメノウ製のナイフ形石器である⁽¹⁾。2は、深鉢の胴部であろう。やや太い単節 LR を地文としている。破片最下端に、わずかに水平方向の沈線が認められる。2は隆帯の上下に縄文が施文されている。隆帯は左方へ向かって太さを増している。隆帯に沿って、ヘラ描きの沈線が加えられ、破片左端近くには、垂下する沈線も見える。4は単節 RL が全面に施文される。5は単節 LR の縦方向の回転押捺による施文であろう。2～5は縄文時代中期後半、加曽利 E 式と思われる。6は、浅鉢の口縁で、内外面共施文はない。内面の口縁下 2 cm 程の部分に、断面三角形の突帯が巡っている。なお、口縁端は丸く作られているが、斜め方向の工具痕がある。施文と言って良いかどうか、判断し兼ねる。7も浅鉢だろうか、外面は無文で、内面は破片上方に、上下を沈線で区画された、巾 2 mm 前後の平坦面に右傾したキザミが巡る。キザミを巡らしたのち再度、沈線に沿った整形を加えている。8も浅鉢であろう。外面は無文で、内面には7と同様な施文がある。破片上方には、二列のキザミ、巾 1 cm 程の無文部をはさんだ下方には、三列のキザミが巡っている。施文順序も7と同様に見える。6～8はいずれも後期中葉加曽利 B 式であろう。9は加曽利 B 式の粗製の深鉢の口縁部で、外面口縁直下の突帯のほとんどが剥落している。わずかに残存している部分では、上からの押圧が加えられている。内面口縁直下には、幅約 1 cm の浅い沈線が巡っている。10も粗製の深鉢の口縁であろう。外面口縁直下に、断面が V 字に近い、4本の沈線が平行して巡らされる。沈線は左傾した整形痕を切っているが、この整形は弱いミガキといった感がある。微細に見ると、条線が走っている。内面及び、口縁端部は水平方向の整形痕が認められる。11、12は同一個体と思われる波状口縁の浅鉢である。口縁端は内側に厚く作られる。波打つ口縁の低い部分には、粘土塊がつけられる。外面口縁直下には、右傾の傾向の強いキザミを2列巡らせている。それぞれのキザミ列の下には沈線が伴う。11では、無文部の下位に、曲線的なキザミ列がある。この付近で、内面の屈曲が認められる。なお、キザミの工具は不明である（曾谷式ではないかと、近藤敏氏の御教示を得た）。13は、やはり、波状口縁の深鉢で、口縁端は、内外に厚くなる。外面口縁直下に単節 RL が巡り、やや狭い無文部をはさんで、下位には一本の水平沈線が巡る。安行式であろう。14～16は安行式の粗製の深鉢である。14のわずかに外傾気味の口縁の外面直下には、三角形の刺突列が巡る。刺突列下位には、二本の平行沈線が巡るが、沈線間には幅約 2.5cm の無文部がある。この部分を見ると、右下がりの荒い整形をしたのちに、垂直方向の整形をしたことが見える。なお、上位の沈線下約 1 cm の部分に爪形の圧痕を消したような痕跡が巡っている。15は、口縁が内側に肥厚する。口縁端は比較的平坦で、外傾気味である。外面口縁



第20図 旧石器時代・縄文時代の遺物(カッコ内は出土遺構番号)



第21図 その他の遺物(カッコ内は出土遺構番号)

直下に、ゆるく右に弧を描く爪形の圧痕が巡る。この圧痕の下端に接して沈線が一本巡っている。この沈線は、上記の圧痕施文後につけられている。沈線の下方は、左傾した浅い沈線で満たされている。この浅い沈線の上端は、爪形の圧痕の部分に及んでいる。左傾した沈線→爪形圧痕→水平沈線の順につけられたことがわかる。なお、破片下端の器壁は約3mmと、かなり薄い。16は、直線的に立ち上がる口縁外面直下に、粘土紐を貼り付けその上にキザミを加えるものである。キザミは、丸棒状工具によると思われるが、全体に不明瞭である。この粘土紐の下端は軽く面取りされている。下位は無文で、水平方向の、弱いミガキ風の整形が行われている。

- (1) このナイフ形石器は、以下の文献で「みのわ」遺跡出土として既に紹介されている。なお、本書では鷹野光行氏作成の実測図を掲載した。田村隆・橋本勝雄 1984『房総考古学ライブラリー 1 先土器時代』（財）千葉県文化財センター

(4) その他の遺物（第21図）

1は、胴部下半に輪積み痕の巡る壺である。輪積み痕の下端は指頭押圧を加えている。爪形の圧痕も残っている。実際の土器作りの工程で、この部位に施文するのは簡単ではなさそうで、おそらく倒位の状態にしたのであろう。輪積み部を境にして、上位では水平方向を基調とするハケメを明瞭に残す。下位は全体的に垂直方向のミガキが加えられているが、接合部に近いところでは左傾したハケメを残している。一部は接合部の下に潜っている。底部外面及び内面は器壁が荒れ気味で整形は不明瞭である。弥生時代後期から古墳時代初頭のものであろう。2は壺の頸部から口縁にかけての部分で、胴部から頸部にかけては曲線を描き、比較的直線的に外方に開き、口縁に至る。口唇は面取りされて外傾している。頸部下端には、柳葉型とでもいうべき形状の長さ5mm、幅2mm前後のキザミが巡る。このキザミ列の上位に接して3条一単位の結節文Sが巡る。外面全面、頸部内面に赤彩が認められるが、口唇部には及んでいないように見える。整形は、外面口縁下1cm程は水平方向のナデ、以下は垂直方向のミガキである。内面は水平方向のミガキだが、口縁下にはハケメがうすく残っている。素口縁で頸部に文様が集中するという特徴的な土器である。弥生時代後期のものと思われる。3は甕で、頸部は外面では曲線的に外方に開くが、内面はやや屈曲が強く、部分的に稜線が見られる。口縁端は丸く作られている。整形は、外面口縁下は水平方向のナデの上から、左傾したハケが、やや間隔をあけて加えられ、頸部下は垂直方向のハケ、より下位は右下がりのハケで満たされている。内面口縁下は水平方向のナデ、胴部も水平方向のナデと見られるが、上位ほど明瞭ではない。古墳時代前半のものであろう。4の甕は千葉市域産であろう。胴部の垂直方向のタタキが特徴的である。体部は底部から直線的に外方に開き口縁直下でさらに外傾する。底部外面は弦方向に一定方向にケズリが行われている。中央付近にややへこんだ部分がある。切り離し技法の痕跡と思われるが判然としない。底部外周の幅5mm前後の範囲は、ヘラケズリされている。それ以外の部分はヨコナデと思われる。白色の粒子を多く含むことも特徴的である。6はロクロ土師器の坏で完形品である。口縁は歪んでおり長い方で径14cm、短い方で12.5cmで、高さは、径の長い方で4cm、短い方で5cmとなっている。外面底部は、全面回転ヘラケズリされており、切り離し技法は不明である。体部下端幅2cm程の範囲も回転ヘラケズリされている。その他の部分はヨコナデである。5、6は9世紀中頃を中心とする時期の所産であろう。

4. まとめ

調査の経緯が触れた通り、極めて緊急の調査であったため、遺跡全体のごく一部を救い出したと言ふべき内容である。それでも国分尼寺と西広貝塚の間が、一種の遺跡の空白地帯となっており、本遺跡がわずかにその間を埋める役割を果たせるのではないかと思う。以下に今回の成果を簡単に総括しておく。

旧石器時代・縄文時代については、遺物の出土は認められたものの、遺構の検出には至っていない。縄文土器は、中期・後期のものが出土している。近隣に当該期の遺構が存在したことを示唆している。

明瞭な遺構が捉えられるのは、弥生時代後期からで、201、203、204等の住居跡がそれにあたる。202、207、208は、良好な遺物の出土に欠けるが、住居の平面形などから推測して、同時期の所産と見ておきたい。大括りに見て、弥生時代後期の住居跡6軒となる。なお、203出土の壺2点（1、4）については胴上半に羽状縄文を一旦施文する点では共通し、弥生時代後期でも後半と見られる。集落の廃絶ののち墓域になったことが、101～105の方形周溝墓の存在からわかる。良好な遺物は出土していないが、周溝の全周しない101が、やや古いかもしれない。102～104は、隣接しているもので、切り合い関係からは104が最も古い。104では壺・甕が出土しているのに対し、103では高坏類で、良好な遺物を出土しているのが対照的で、供献土器の転換が起こったようにも見える。なお、両遺構の出土遺物は、古墳時代前期、大村直氏の編年案でのTE1a式に位置付けられるのではないかとと思われる⁽¹⁾。なお、103出土の1、2などの東海系の高坏は、廻間Ⅳ式後半に位置付けられよう。本遺跡の南西約700mの地点にある蛇谷遺跡とは時代的に重なるものと見られる⁽²⁾。本遺跡では蛇谷遺跡のような、古墳時代前期の集落の痕跡は見出されないが、おそらく近隣には存在したのであろう。

205、206の住居跡は奈良時代後半から平安時代初頭にかけての住居跡である。出土遺物の様相からは、205の方が古相を留めるものがやや目立つが共通する部分もあり、ほぼ同時期と見て差し支えないと思われる。遺跡の位置およびその時期から見て、上総国分尼寺との何らかの関連が考えられるが、その具体的中身を検討するには材料不足である。同時期の遺跡が概して希薄な中であって、尼寺と同じ台地上の南方に、その種の存在が明らかになったことは、1つの成果ではあったであろう。

以上、簡単な総括となったが、本来の遺跡の広がりを考えるならば、非常に断片的な様相を捉えたにすぎず、語り得ることも多くはない。国分寺台地区の歴史の動向の中で、どのように位置付けられるかは、今後の課題であろう。著名な遺跡のみでなく、本遺跡のような、断片的な遺跡の成果を包括した歴史の再構築を望むものである。

(1) 大村直 1994 「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第25号

(2) 須田勉・新田栄治他 1977 『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査団

第1表 南祇園原遺跡出土遺物観察表

挿図番号	建物番号	出土遺物	種別	器種	遺存度	法量（+は現存値、（ ）は復元値）				技法			胎土	色調	焼成	備考	
						口径	底径	器高	頸径	胴径	最大径	内面					外面
第6図	1	201	弥生土器	壺	底部欠損	11.6		20.0+	9.1	23.6	胴部	水平ナデ／ナデ	水平ナデ／垂直ナデ／水平ナデ		砂粒含む	明褐色 黒斑	良好
	2	201	弥生土器	高坏	坏部は1／3	23.1	12.2	16.9	6.3			水平ナデ	水平弱いミガキ／垂直弱いミガキ		砂粒多い	明褐色	不良
	3	201	弥生土器	鉢	1／3	11.2	4.4	4.9				丁寧なナデ 強いナデ	水平ナデ／ケズリ・ナデ	ナデ	微砂粒含む	橙色	良好
	4	201	弥生土器	甕	部分	18.7		14.1+	16.4	22.5	胴部	水平ナデ	水平ナデ	ナデ	細砂粒含む	明褐色	良
	5	201	弥生土器	壺	底部1／2		9.6	6.2+				水平ナデ	ナデ	ナデ	細砂粒含む	暗褐色 黒斑	不良
	6	201	弥生土器	壺	底部破片		8.6	3.2+				ナデ	ナデ	ナデ	細砂粒含む	明褐色	良
	7	201	弥生土器	壺	底部のみ		10.0～ 10.4	5.3+				ナデ	右下がり弱いミガキ	弧方向ナデ	細砂粒含む	明褐色	良
	8	201	弥生土器	甕	底部のみ		7.1～ 7.4	5.3+				左下がりミガキ	水平・垂直ミガキ	弧方向ケズリ	細砂粒含む	暗褐色 黒斑	良
	9	201	弥生土器	壺	底部のみ		9.9～ 10.2	2.1+				ナデ	水平弱いミガキ	ナデ	細砂粒含む	淡褐色	良
第9図	15	202	初鎌車					1.5									
	1	203	弥生土器	壺	胴部のみ	21.1	9.0	(38.9)	(9.9)	31.5	胴部	ナデ	水平ミガキ／垂直ミガキ	弦方向ナデ	細砂粒含む	褐色	良好
	2	203	弥生土器	鉢	部分欠く	21.4	7.0	10.1～ 10.8				水平ナデ	水平ナデ	ナデ	砂粒含む	褐色	良
	3	203	弥生土器	甕	頸部のみ			9.9+	20.0	23.6+	胴部	水平弱いミガキ	水平ナデ		砂粒含む	暗褐色	良
	4	203	弥生土器	壺	胴部3／2		10.8	29.3+	11.5	34.5	胴部	ナデ	水平ミガキ／左傾したミガキ／垂直ナデ	ナデ	細砂粒多い	褐色	やや甘い
	5	203	弥生土器	鉢	部分欠く	11.7	5.7	4.8 ～5.3				水平ミガキ	水平ミガキ	ナデ	細砂粒含む	褐色 黒斑	良好
	6	203	砥石		完存												安山岩
	7	203	磨石		半存												砂岩
	8	204	弥生土器	鉢	3／1	17.0	6.5	11.3				水平ナデ	水平ナデ	ナデ	砂粒多い	淡褐色 黒斑	やや不良
第11図	9	204	弥生土器	壺の甕	底部破片		6.5	2.3+				ナデ	水平ナデ	ナデ	砂粒多い	暗褐色	やや甘い
	10	204	弥生土器	壺の甕	底部のみ		7.7	1.9+				ナデ	ナデ	ナデ	砂粒多い	褐色	甘い
	1	205	土師器	甕	1／3	13.8	5.5	16.2	12.8	14.9	胴部	水平ナデ／右下がりナデ	水平ナデ／垂直ケズリ／水平ケズリ	不整方向ケズリ	砂粒含む	暗褐色	良
	2	205	土師器	甕	上半1／2	21.8		8.1+	17.9	19.2+	口縁部	水平ナデ	水平ナデ		砂粒含む	暗褐色	良
	3	205	土師器	甕	上半1／3	22.5		10.9+	19.4	20.4	口縁部	水平ナデ	水平ナデ／垂直ケズリ		砂粒含む	暗褐色	良
	4	205	土師器	甕	上半1／3	21.6		5.9+	18.8	20.2+	口縁部	水平ナデ	水平ナデ／垂直ケズリ		砂粒含む	淡暗褐色	良
	5	205	土師器	甕	上半1／4	23.2		16.2+	19.5	20.8	口縁部	水平ナデ	水平ナデ／垂直ケズリ		砂粒含む	暗褐色	良
	6	205	土師器	甕	下半部分		7.0	10.7+		19.0+		水平ケズリ	水平ケズリ		砂粒多い	暗褐色	不良
	7	205	土師器	甕	底部1／2		5.2	3.3+				ナデ	水平ケズリ	弦方向ケズリ	細砂粒含む	暗褐色	良
	8	205	土師器	甕	底部のみ		7.2	2.5+				ナデ	水平ケズリ	不整方向ケズリ	細砂粒含む	明褐色	良好
	9	205	土師器	甕	底部のみ		4.4	1.1+				ナデ(縦)	水平ケズリ	不整方向ケズリ	細砂粒含む	淡赤褐色	良好
	10	205	土師器	坏	底部破片		6.1	1.0+				弦方向ナデ		不整方向ケズリ	砂粒含む	褐色 黒斑	良好
	11	205	ロクロ土師器	坏	口縁欠く1／2		7.9	5.2+				水平ミガキ	ヨコナデ／回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	細砂粒含む	淡褐色	良好
																	内黒土器 底部外面に 「三」状の線刻

標図番号	遺物番号	出土遺跡	種別	器種	遺存度	法量(±は現存値、()は復元値)				最大径	技法		胎土	色調	焼成	備考
						口径	底径	器高	胴径		内面	外面				
第11図	12	205	ロクロ土師器	坏	3/4	17.8	8.9	4.6			ミガキ	底外面 ミガキ	細砂粒含む	淡赤褐色	良	内黒土器
	13	205	須恵器	坏	部分	13.2	8.4	4.6			ヨコナデ	ヨコナデ/回転ヘ ラケズリ	砂粒含む	暗灰色	良好	千葉市産
	14	205	ロクロ土師器	坏	1/3	14.2	8.9	4.6			ヨコナデ	ヨコナデ/回転ヘ ラケズリ	砂粒含む	暗赤褐色	良	
	15	205	ロクロ土師器	坏	部分	11.3		3.4+			ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒含む	褐色	良	
	16	205	須恵器	坏	3/4	13.3	8.1	4.2			ヨコナデ	ヨコナデ 回転糸切り 周囲回転ヘラケズ リ	微砂粒含む	暗灰色	良	市原市産
	17	205	土師器	坏	部分	14.5		4.0+			水平ナデ	右下がりケズリ	砂粒含む	褐色	良	
	18	205	ロクロ土師器	坏	3/4	12.4	10.0	3.9			ヨコナデ	ヨコナデ/水平ケ ズリ	砂粒多い	暗褐色	不良	
	19	205	土師器	坏	2/3	11.5	7.3	4.5			水平ナデ	水平ナデ/水平ケ ズリ	細砂粒含む	暗褐色	良	
第13図	20	205	ロクロ土師器	坏	1/3	13.1	9.8	3.7			ヨコナデ	ヨコナデ/水平ケ ズリ	細砂粒含む	淡褐色	やや甘い	
	21	205	土師器	坏	1/4	11.4	7.4	3.8			水平ナデ	水平ナデ/水平ケ ズリ	細砂粒含む	淡褐色 黒斑	良	
	1	206	土師器	甕	口縁一部	19.5		7.8+	16.3	18.8	水平ナデ	水平ナデ/垂直ケ ズリ	砂粒含む	褐色	良好	
	2	206	土師器	甕	口縁部分	25.4		9.2+	20.7	21.5	水平ナデ	水平ナデ/垂直ケ ズリ	細砂粒含む	暗褐色	良好	
	3	206	土師器	甕	口縁部分	25.4		14.9+	24.0	27.0	水平ナデ	水平ナデ/垂直ケ ズリ/右傾したケ ズリ	砂粒含む	褐色	良好	
	4	206	土師器	甕	口縁 1/4	21.6		6.5+	17.5	18.8+	水平ナデ	水平ナデ/垂直ケ ズリ	砂粒含む	茶褐色	良	口縁部に輪積み 痕
	5	206	須恵器	坏	僅かに欠く	12.5	7.2	4.1			ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒含む	暗灰色	やや甘い	市原市産
	6	206	ロクロ土師器	坏	2/3	13.0	7.2	3.6			ヨコナデ	ヨコナデ/手持ち ヘラケズリ	砂粒含む	暗褐色	不良	外面スス付着
	7	206	ロクロ土師器	坏	1/5	17.9	6.8	5.8			水平ミガキ	ヨコナデ/回転ヘ ラケズリ	微砂粒含む	褐色	良好	内黒土器
	8	206	ロクロ土師器	坏	口縁欠く 1/4		6.8	3.5+			ヨコナデ	ヨコナデ/回転ヘ ラケズリ	細砂粒含む	暗褐色	良好	底部内面に 「X」の縄刻
	9	206	須恵器	瓶	底部 1/2		12.5	7.0+			ヨコナデ	ヨコナデ/回転ヘ ラケズリ	密	暗灰色	堅緻	外面えび茶色
	10	206	須恵器	甕	下半部分		14.0	15.1+	23.6		ナデ/水平ナデ	タタキ/ケズリ	砂粒含む	暗灰色	やや甘い	
第19図	1	103	土師器	碗形高坏	部分欠く	12.5	16.7 17.1	10.1 11.4	3.0		杯部 垂直ミガキ 脚部 水平ミガキ	右下がりミガキ 垂直ミガキ	微砂粒含む	褐色 黒斑	良好	穿孔4カ所
	2	103	土師器	有縁高坏	部分欠く	18.5	11.0	13.4	2.6		杯部 水平ナデ/垂 直ナデ 脚部 水平ハケ/水 平ナデ	水平ナデ/左傾ナ デ/水平ナデ 垂直ミガキ/水平 ミガキ	微砂粒含む	褐色 黒斑	良好	穿孔3カ所
	3	103	土師器	小型甕	部分欠く	9.0	3.7	6.7	8.0	8.5	水平ミガキ	水平ミガキ	砂粒多い	暗赤褐色	良	上げ底気味 口縁外面の一部 にハケ
	4	103	磨製石斧		断片											砂岩製
	5	104	土師器	壺	底部口縁 欠く部分		10.4	35.8+	12.5	42.9	水平ハケ・垂直ミガ キ/水平ナデ	ハケ/垂直ミガキ /左傾ハケ	細砂粒含む	淡茶褐色	良好	
	6	104	土師器	壺	底部欠く 部分	21.7		33.8+	13.3	40.1	水平ミガキ/垂直ミ ガキ/水平ナデ	水平ナデ/ハケ/ 垂直ハケ/右下が りミガキ	細砂粒含む	淡茶褐色	良好	
	7	104	土師器	埴	口縁底部 欠く			13.3+	7.9	15.3	ナデ	ナデ	細砂粒含む	明褐色	良好	

葬園番号	遺物番号	出土遺物	種別	器種	遺存度	法量(＋は現存値、()は復元値)				技 法			胎 土	色 調	焼 成	備 考
						口 径	底 径	器 高	頸 径	胴 径	最大径	内 面	外 面			
第19図	8	104	土師器	甕	部分			12.5+	13.5	18.3	胴部	水平ハケ	左傾ハケ／垂直ハケ／水平ハケ	暗褐色	良	外面スス付着
	9	104	土師器	甕	口縁部分	16.7		9.0+	13.4	22.2+	胴部	水平ナデ／ナデ	水平ナデ／ナデ	暗褐色	良	メノウ製
第20図	1		旧石器	ナイフ形石器		長さ4.2	幅1.8	厚さ0.8								
第21図	1	302	弥生土器	甕	下半1／2		8.2	11.4+		27.8		ナデ	右下がりハケ／垂直ミガキ	褐色黒斑	やや甘い	縁残み痕下端を指頭押圧
	2	302	弥生土器	甕	口縁1／2	13.1		7.6+	7.6			水平ミガキ	水平ナデ／垂直ミガキ	明褐色	良	内面丹塗り
	3	302	土師器	甕	口縁1／4	19.1		9.8+	16.8	20.7	胴部	水平ナデ	左傾ハケ／垂直ハケ／右下がりハケ	暗褐色	良好	
	4	302	須恵器	甕	口縁	25.3		6.4+	23.0		口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ／垂直タタキ	暗褐色	良	千葉市産
	5	302	須恵器	坏	1／2	12.5	7.8	3.6				ヨコナデ	ヨコナデ	暗黒褐色	良	千葉市産
	6	203	ロクロ土師器	坏	完形	12.5～14.0	7.0	4.0～4.6				ヨコナデ	ヨコナデ／回転ヘラケズリ	暗茶褐色	良好	

第 2 表 南祇園原遺跡住居跡一覧表

遺構番号	時 代	規模 (m)		残存床面積 (m ²)	主軸方位	主柱穴間の距離 (m)				
		縦軸	横軸			P1～P2	P3～P4	P1～P3	P2～P4	
201	弥生			9.29	N-48°-W	3.02	2.92	2.06	2.08	
202	弥生			20.07						
203	弥生	7.66	7.02	25.35	N-32°-W	3.8	3.9	3.84	4	
204	弥生	3.66	3.45	9.41	N-40°-E	2.8	2.48	1.46	1.64	
205	奈良・平安	3.4	3.36	6.02	N-3°-E					
206	奈良・平安	3.16	3.42	8.18	N-8°-E					
207	弥生			5.34						
208	弥生			5.84	N					

第 3 表 南祇園原遺跡方形周溝墓一覧表

遺構番号	周溝の形状	軸方位	規模 (m)	占有面積 (m ²)	周溝幅 (m)	周溝深さ (cm)
101	全周しない	N-19°-W	12.5×11.6	150	1.1～1.6	20～39
102	全周する	N-33°-W	10.4×10.4	110	0.9～1.2	16～31
103	全周する	N-39°-W	10.4×10	100	0.7～1.2	21～26
104	全周しない？	N-42°-W	12×10.8	130	1.2～1.6	20～37
105	全周する	N-35°-W	7×7	50	0.6～0.8	11～24

第2章 持塚5号墳・上神台塚群

1 遺跡の立地と調査概要

上神台塚群は、養老川下流域北岸の沖積平野に面した台地辺縁に位置し、昭和48年度に発掘調査を実施した。調査方法はマウンドに交差するようトレンチを設定したもので、面的な調査には至らなかったが、その調査成果をここに報告するものである⁽¹⁾。本報告が市原地域の終末期古墳研究の一資料として活用されれば幸いである。

遺跡は従来、12基の塚群からなるものとされていたが⁽²⁾、調査の結果、このなかの1基が終末期古墳であることが確認されたので、持塚古墳群に含められ、「持塚5号墳」として周知されるようになった⁽³⁾。持塚古墳群は前方後円墳1基、円墳3基、方墳2基の計6基からなり、古墳時代中期から終末期にわたる遺跡であるが、あくまでも便宜的な呼称とされている⁽⁴⁾。

一方、塚群は、低マウンドの塚10基からなるものと想定されたが、うち1基はマウンドが脆弱で、単なる土寄せと思われたので、調査対象から除き、9基の塚群として把握することとなった⁽⁵⁾。

調査の結果、5基(2号・3号・6号・7号・9号塚)は、方形のマウンドであることが確認され、持塚5号墳とともに終末期の古墳群を形成した可能性がある。しかし遺物も乏しく、塚か古墳か断定することはできなかった。残りの4基(1号・4号・5号・8号塚)については、マウンドの遺存が悪く、形状や規模について明確にできなかった。

2 遺構と遺物

持塚5号墳

遺 構：2本のトレンチにより周溝のコーナー4カ所が検出され、外法東西22.3m×南北19m、内法東西17.6m×南北15.7mを測る方墳であることが確認された。東西軸が若干長い平面形状を呈し、南側は谷に面しているため、この面のみ周溝の外法が存在しない。周溝掘形は断面が逆梯形で、比較的しっかり掘り込まれている。墳丘の依存度は必ずしも良好でないが低く、周囲の地表面との比高差は1m程度にとどまる。遺構規模から古墳時代終末期、7世紀後半代の築造と推定されている⁽⁶⁾。主体部は確認できなかった。

なお、古墳南側斜面は後世に段状に整地され、焼土が認められたが、詳細な時期は不明である。

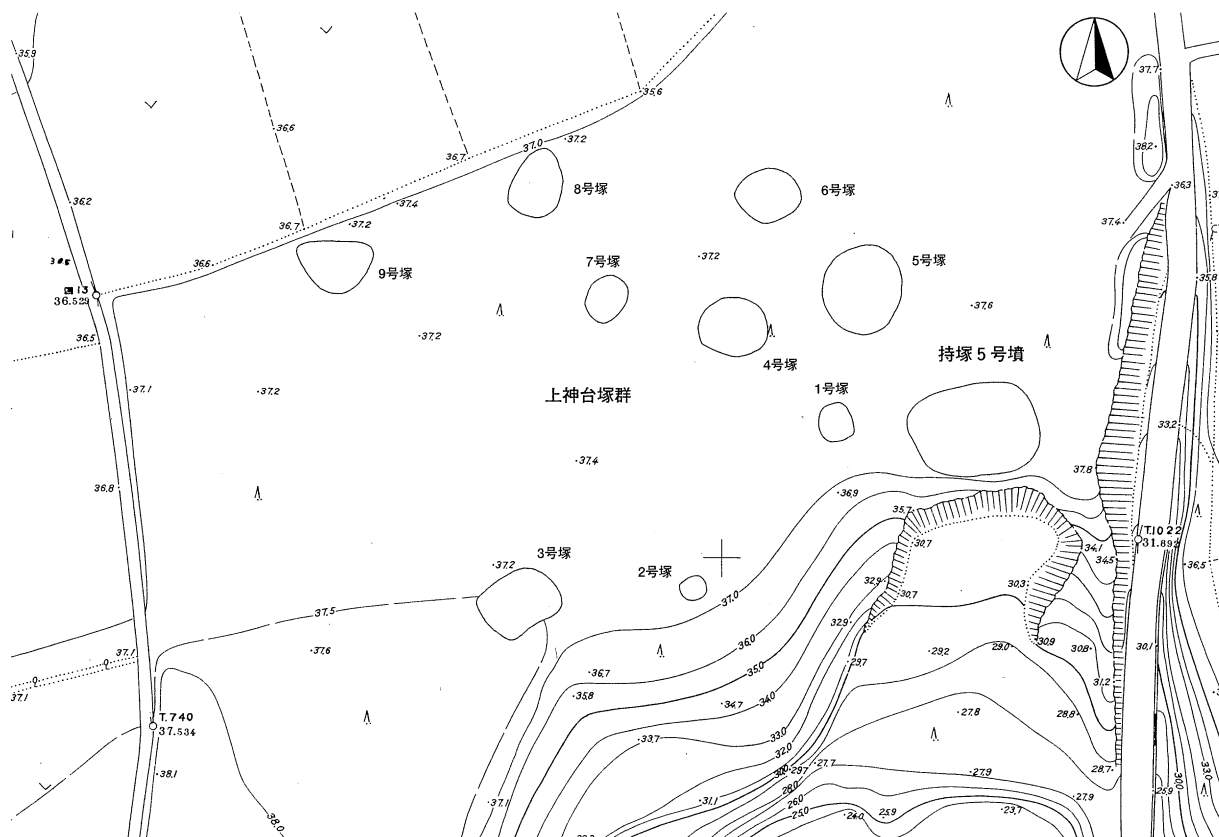
遺 物：須恵器(1)と古代瓦(5)が出土している。いずれも古墳の築造推定時期より新しいため、流れ込みと思われる。1は須恵器杯で、8世紀の遺物である。5は国分寺に関連する平瓦と思われ、東側周溝内に流れ込んでいた。

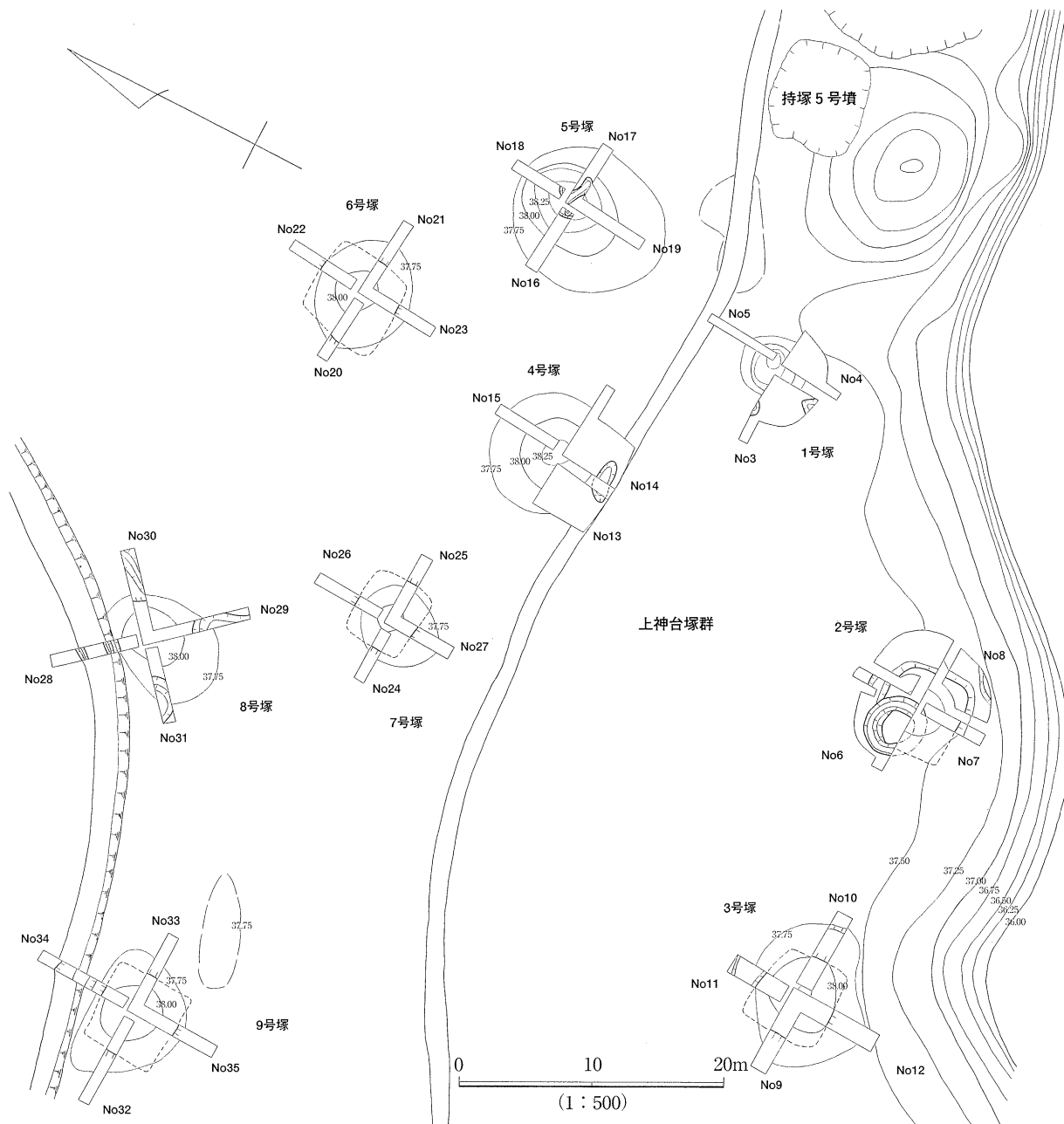
上神台塚群

1号塚：周囲の地表面から0.8m程度の比高差を測る小マウンドを持つが、周溝は認められなかった。3トレンチ内に土坑が2基検出されているが、塚とともに時期不明である。

2号塚：マウンドは極めて低く、周囲の地表面から若干の高まり(比高差0.25m程度)を認めるにすぎないが、調査の結果、方形の塚と円形の溝(塚を造築し直した跡か)が切り合っていることが確認できた。便宜的に前者を2号塚A、後者を2号塚Bとする。マウンド自体は塚A固有のものに見えるが、塚Bの方が新しい。

遺 物：須恵器が出土している(2～4)。2は坏蓋である。3は高台付坏で、底部はふくらみを持ち、



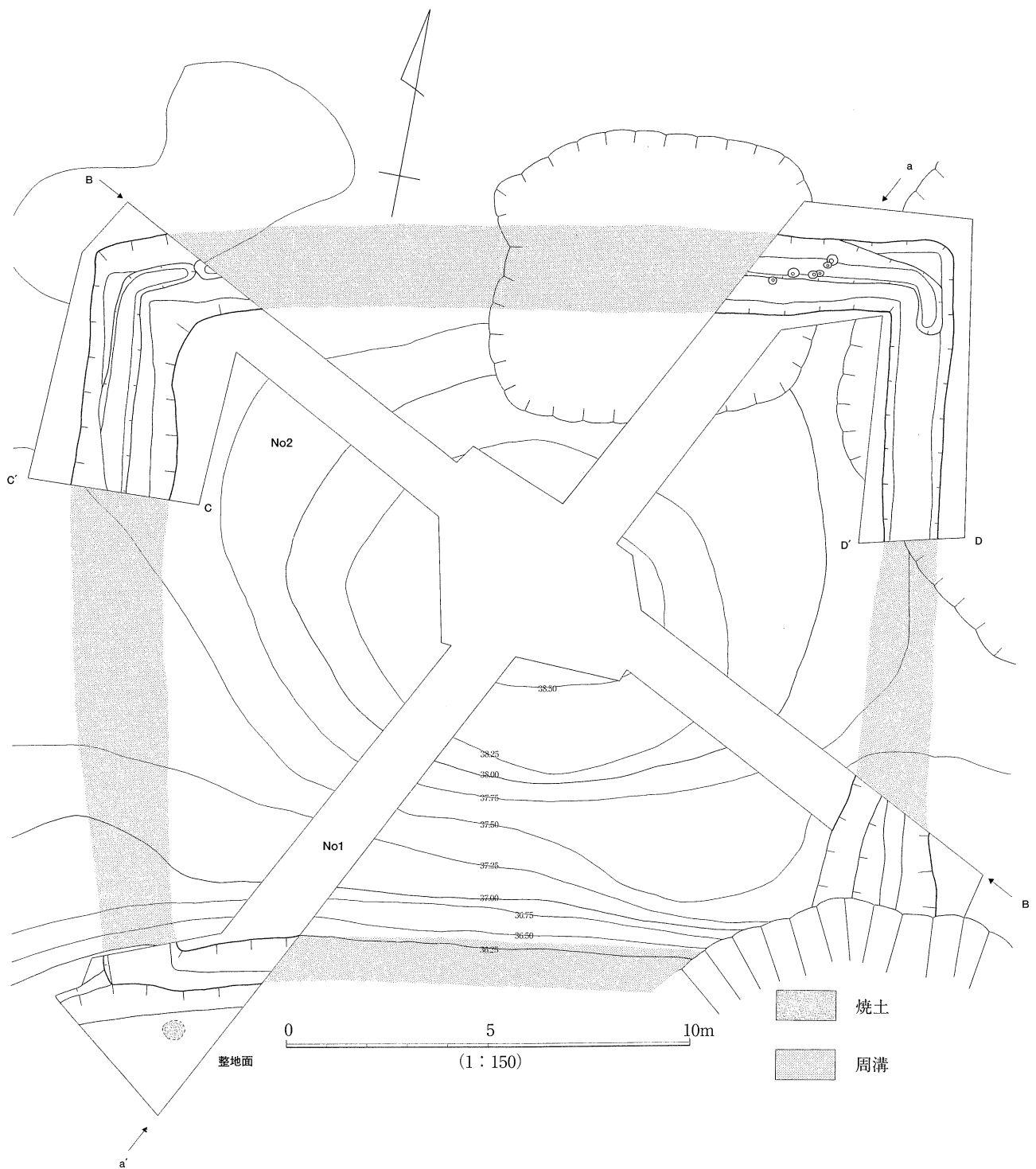


第24図 上神台塚群トレンチ配置図 (Noはトレンチ番号)

高台畳付のレベルより突出するものと思われる。2・3とも8世紀初頭の遺物である。4は坏で、8世紀中葉の遺物である。仮に塚群を終末期古墳群と想定した場合、2と3は遺構に伴う可能性を指摘しうる。しかし塚群を古墳とする積極的根拠に乏しいため、塚に流れ込んだ遺物と捉えておく。

3号塚：マウンドは周辺地表面との比高差0.5m程度で、やや谷側に流れている。調査の結果、方形のマウンドであることが確認できた。

4号塚：周辺地表面から比高差0.5m程度の円形マウンドを持つが、立ち上がりはきわめて緩く、正確な平面形状はつかめなかった。なお、南側(13・14トレンチ)に楕円形の土坑が検出されている。



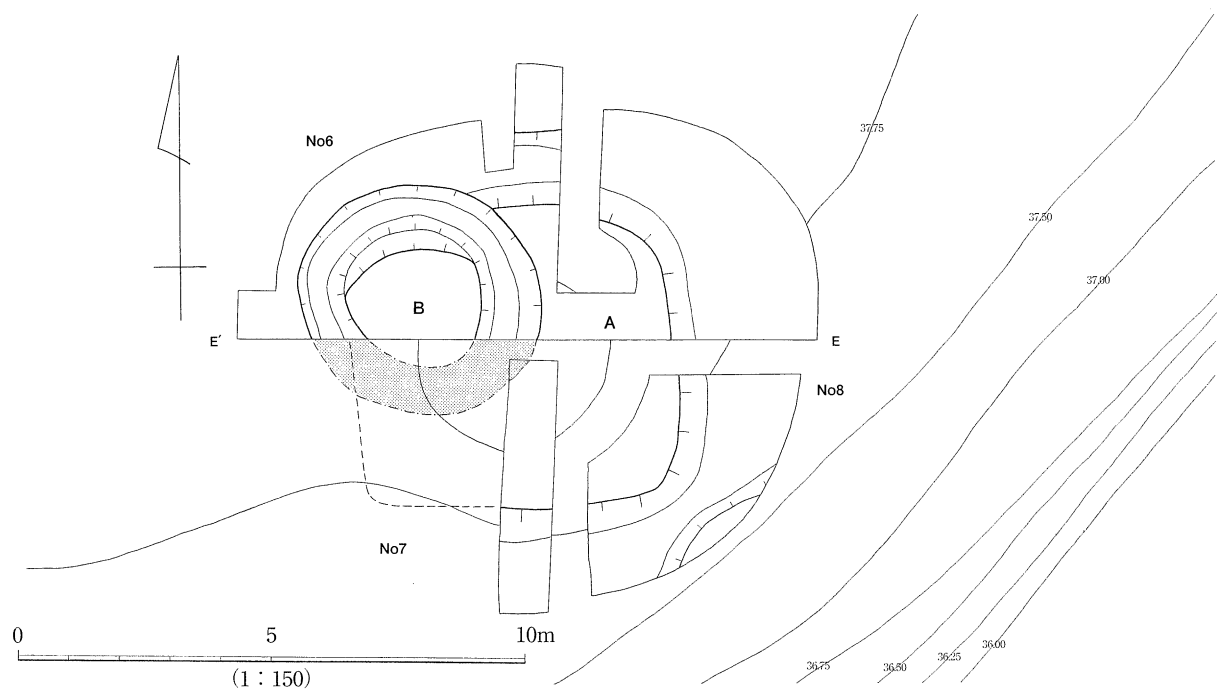
第25図 持塚5号墳トレンチ配置図 (Noはトレンチ番号)

遺構深度0.1m程度で、掘り込みもしっかりしない。塚より新しい。

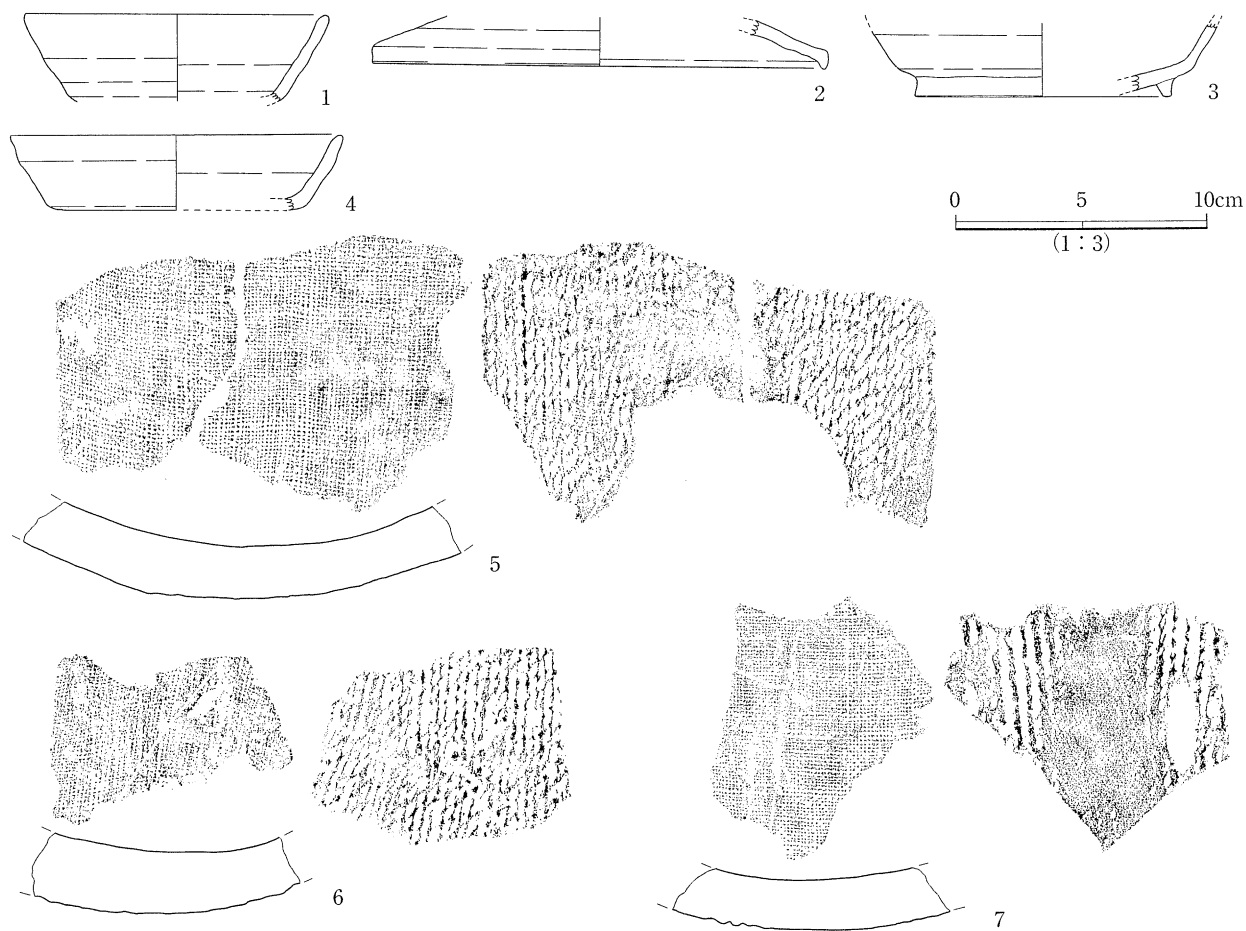
5号塚：周辺地表面から比高差0.8m程度の楕円形マウンドを持つが、立ち上がりはきわめて緩く、正確な平面形状はつかめなかった。なお、マウンド直下(17トレンチ)から溝状の土坑が1基検出された。遺構深度0.35mを測るが、性格は不明である。塚のマウンドより古い。

6号塚：マウンドは極めて低く、周囲の地表面から若干の高まり(比高差0.3m程度)を認めるにすぎないが、方形の塚であることが確認された。

遺物：古代瓦が出土した(6)。国分寺に関連する瓦と思われ、遺構に伴わない流れ込みである。



第27図 上神台 2 号塚トレンチ配置図 (Noはトレンチ番号)



第28図 持塚 5 号墳・上神台塚群出土遺物実測図

7号塚：マウンドは極めて低く、周囲の地表面から若干の高まり（比高差0.3m 程度）を認めるにすぎないが、方形の塚であることが確認された。

8号塚：マウンドは極めて低く、周囲の地表面から若干の高まり（比高差0.3m 程度）を認めるにすぎず、平面形状も把握できなかった。

遺 物：古代瓦が出土した(7)。国分寺に関連する瓦と思われ、遺構に伴わない流れ込みである。

9号塚：マウンドは極めて低く、周囲の地表面から若干の高まり（比高差0.3m 程度）を認めるにすぎないが、方形の塚であることが確認された。

註釈

- (1) 本遺跡については、すでに『南向原』－上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ－（滝口宏・市毛勲編、上総国分寺台遺跡調査団、昭和51年1月発行、第4章Ⅱ－1《須田勉執筆》）で概要が報告されている。併せて参照されたい。
- (2) 「東間部多古墳群」（滝口宏・市毛勲・須田勉編、上総国分寺台遺跡調査団、昭和49年10月発行）の付表による。
- (3) 「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図」－北部編－（市原市教育委員会、昭和63年3月発行）。
- (4) 持塚古墳群については、田中新史『上総市原台の光芒』－市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団－（市原古墳群刊行会、平成12年12月発行）に紹介されているので、参照されたい。
- (5) 註釈(1)文献参照。
- (6) 註釈(4)文献参照。

第4表 持塚5号墳・上神台塚群遺構一覧表 ()内は推定値

遺 構 名	調査時の 遺構名	形体	周溝	(m) 規模(周溝外法、周溝が 無いものはマウンド幅)	面積(m ²)		長軸方位	出土遺物	備 考
					周溝外法	周溝内法 (マウンド)			
持塚5号墳	M001	方形	有	東西22.3×南北19.0	423.7	276.3	N-9°-W	須恵器坏、布目瓦	
上神台1号塚	M002		無	東西4.7×南北5.0		23.5	N-15°-W		
上神台2号塚A	M003	方形	無	東西6.4×南北6.1		39.0	N-7°-W	須恵器坏・高台付坏	2号塚Bより古い
上神台2号塚B	M003	円形	有	東西4.7×南北(4.6)	17.3	5.7	N-26°-W		2号塚Aより新しい
上神台3号塚	M004	方形	無	東西6.6×南北6.0		39.6	N-0°		
上神台4号塚	M005		無	東西9.3×南北8.5		78.5	N-4°-E		南に土坑
上神台5号塚	M006		無	東西10.4×南北12.4		102.0	N-6°-E		
上神台6号塚	M007	方形	無	東西6.6×南北6.8		44.9	N-8°-E	布目瓦	
上神台7号塚	M008	方形	無	東西5.7×南北5.0		28.5	N-2°-E		
上神台8号塚	M009		無	東西6.1×南北9.2		45.9	N-8°-E	布目瓦	北東に溝、南西に土坑
上神台9号塚	M010	方形	無	東西6.6×南北6.2		40.9	N-2°-E		
	M011								近年の寄せ土と思われ、 調査対象外

第5表 持塚5号墳・上神台塚群出土遺物観察表（土器）

遺 構	No.	種 別	器 種	状況	特 徴	焼成	色 調	胎 土	口径	底径	最大径	備 考
持塚5号墳	1	須恵器	坏	一括	ロクロ水挽き	良好	灰白色	極めて硬質	(11.9)		(12.0)	8C
上神台2号塚	2	須恵器	坏蓋	一括	ロクロ水挽き	良好	灰色		(17.8)		(18.0)	8C初頭頃
上神台2号塚	3	須恵器	高台付坏	一括	ロクロ水挽き	良好	灰色			(10.0)		8C初頭頃
上神台2号塚	4	須恵器	坏	一括	ロクロ水挽き	良好	灰色		(13.0)	(10.0)	(13.0)	8C中葉頃

第6表 持塚5号墳・上神台塚群出土遺物観察表（瓦）

遺 構	No.	種別	出土位置	遺存度	各部位の特徴		
					凹面	凸面	側面・端面
持塚5号墳	5	平瓦	東側周溝一括	1/4	布目痕	目が深く粗い縄目叩きが縦に入る	遺存せず
上神台6号塚	6	平瓦	21トレンチ一括	1/8	布目痕	目が深く粗い縄目叩きが縦に入る	遺存せず
上神台8号塚	7	平瓦	29トレンチ一括	1/8	布目痕	目が深く粗い縄目叩きが縦に入る	遺存せず

写 真 图 版

上総国分寺台遺跡調査報告 Ⅷ

市原市南祇園原遺跡
持塚 5 号墳
上神台塚群

2002年3月20日 印 刷

2002年3月28日 発 行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市原市教育委員会

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

TEL 0436(41)7300

印 刷 株式会社 エリート印刷

南祇園原遺跡



遺跡の位置と周辺の地形（国土地理院、昭和36年）

南祇園原遺跡



南祇園原遺跡全景

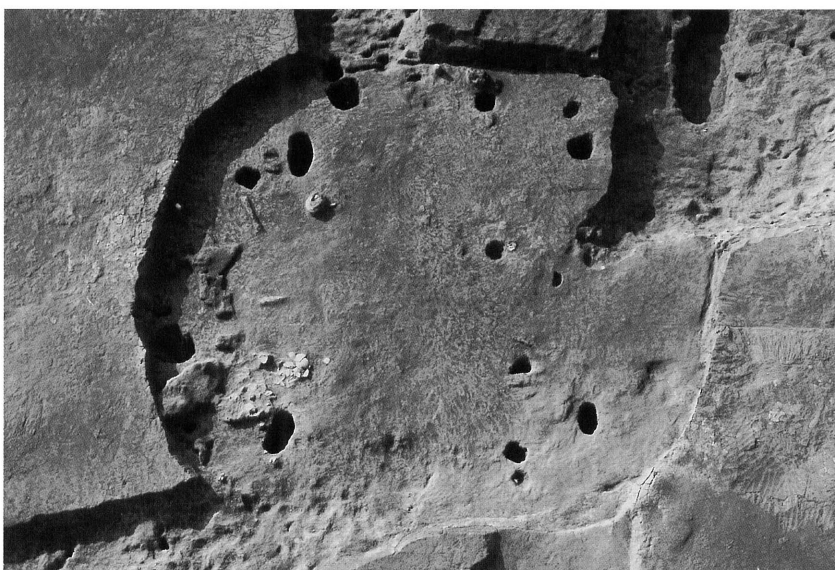


201号住居跡

南祇園原遺跡



202号住居跡



203号住居跡

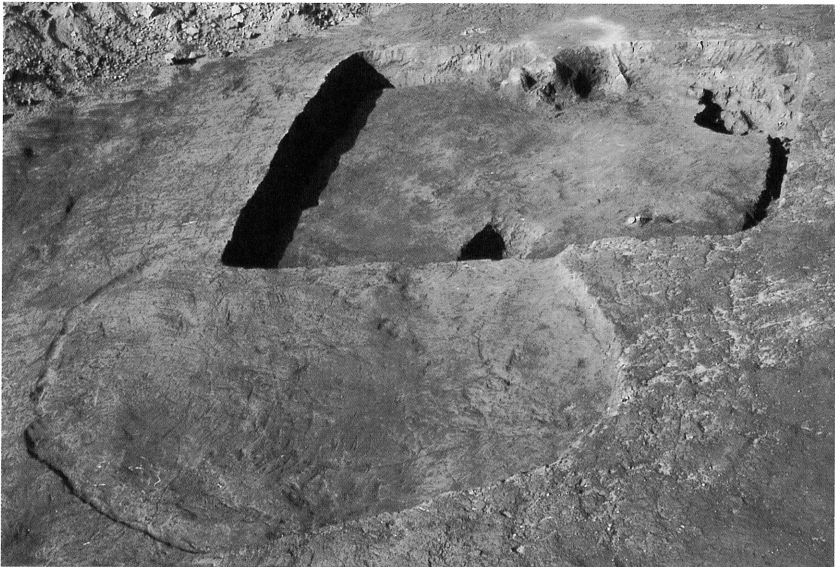


203号住居跡 遺物出土状況

南祇園原遺跡



204号住居跡



206号（上）・207号（下）住居跡



208号住居跡と周辺の攪乱土坑

南祇園原遺跡



205号住居跡



206号住居跡

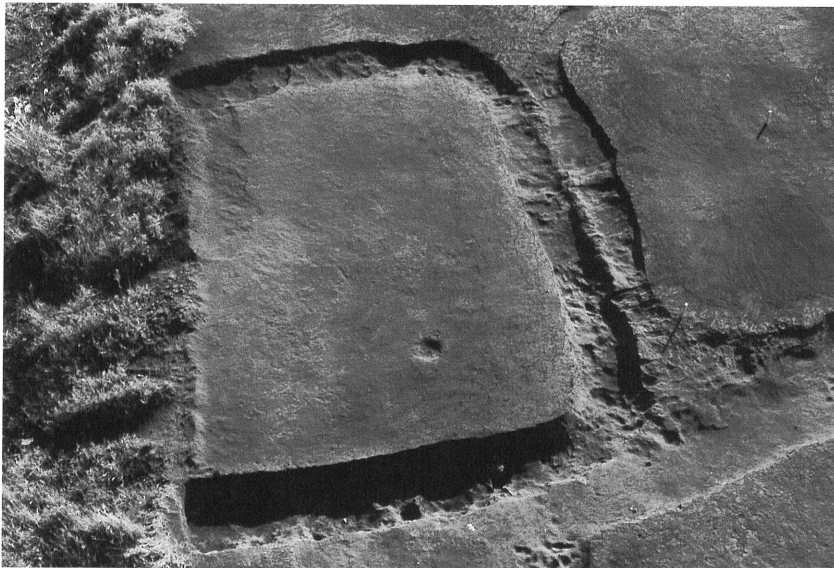
205号（下左） 206号（下右） カマド



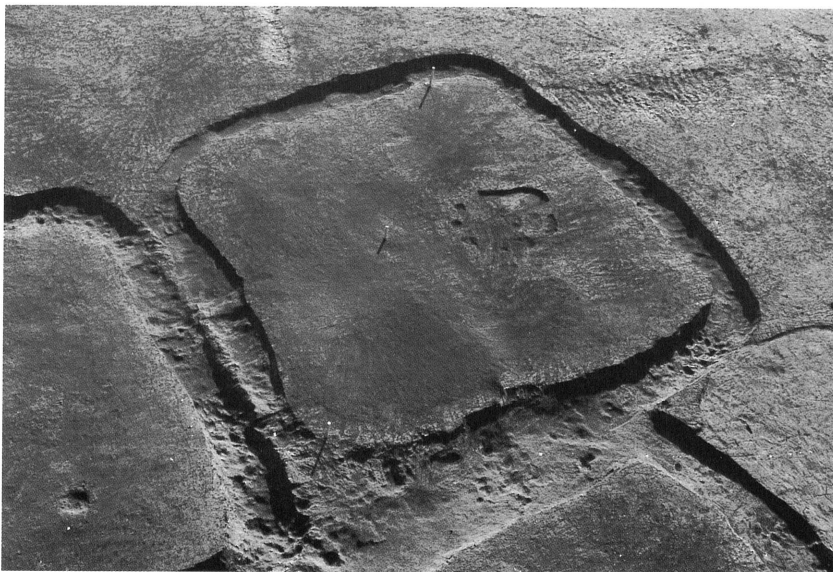
南祇園原遺跡



101号方形周溝墓

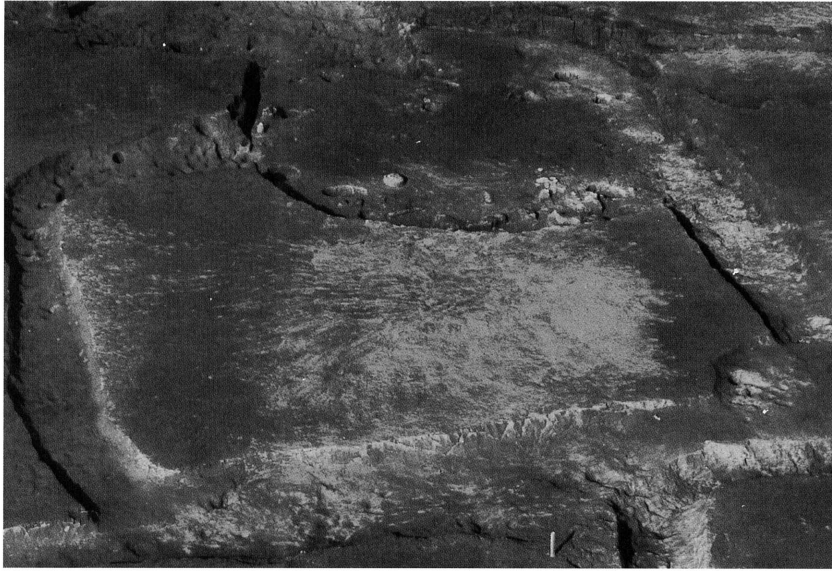


102号方形周溝墓



103号方形周溝墓

南祇園原遺跡



104号方形周溝墓

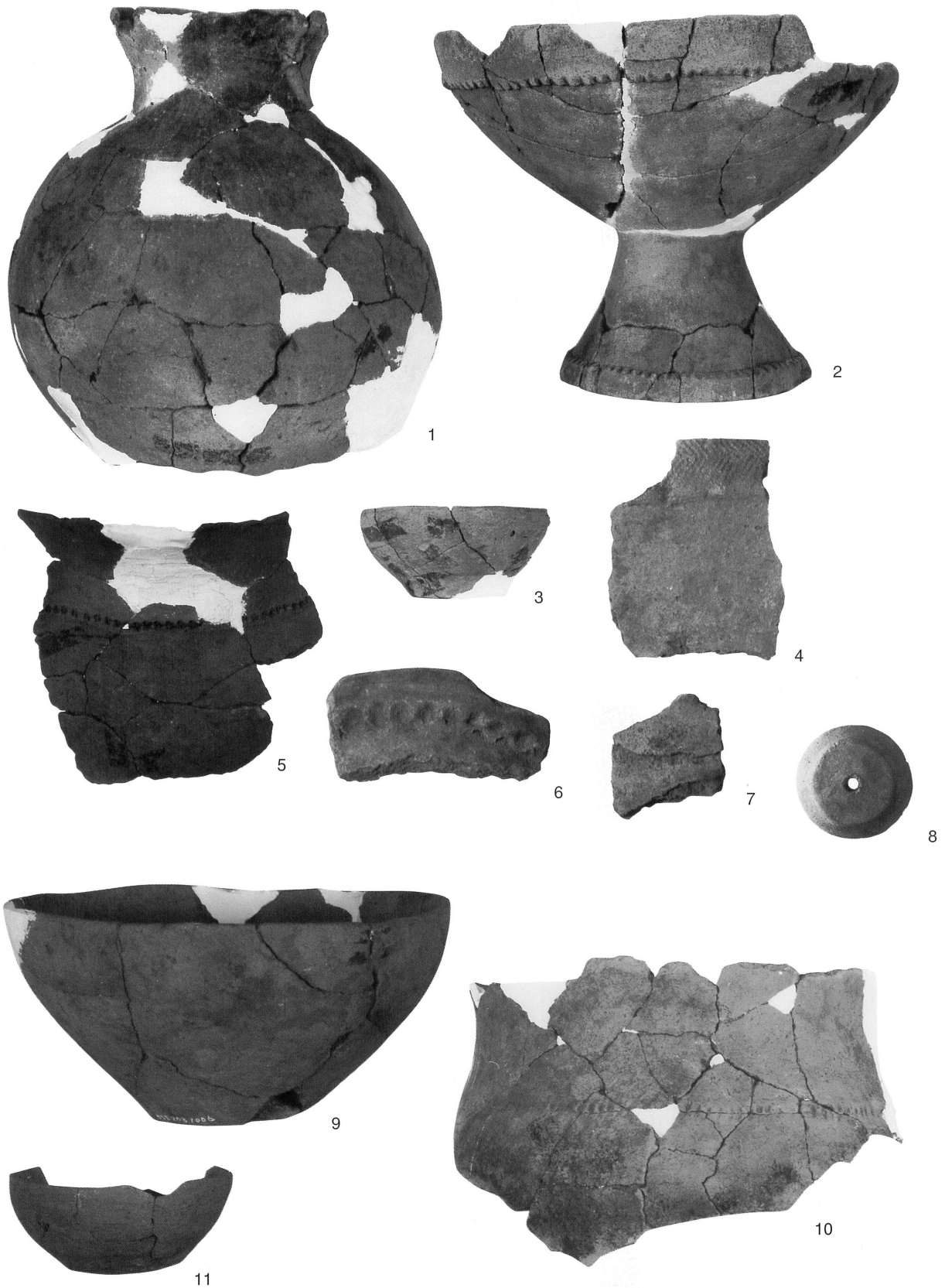


104号遺物出土状況



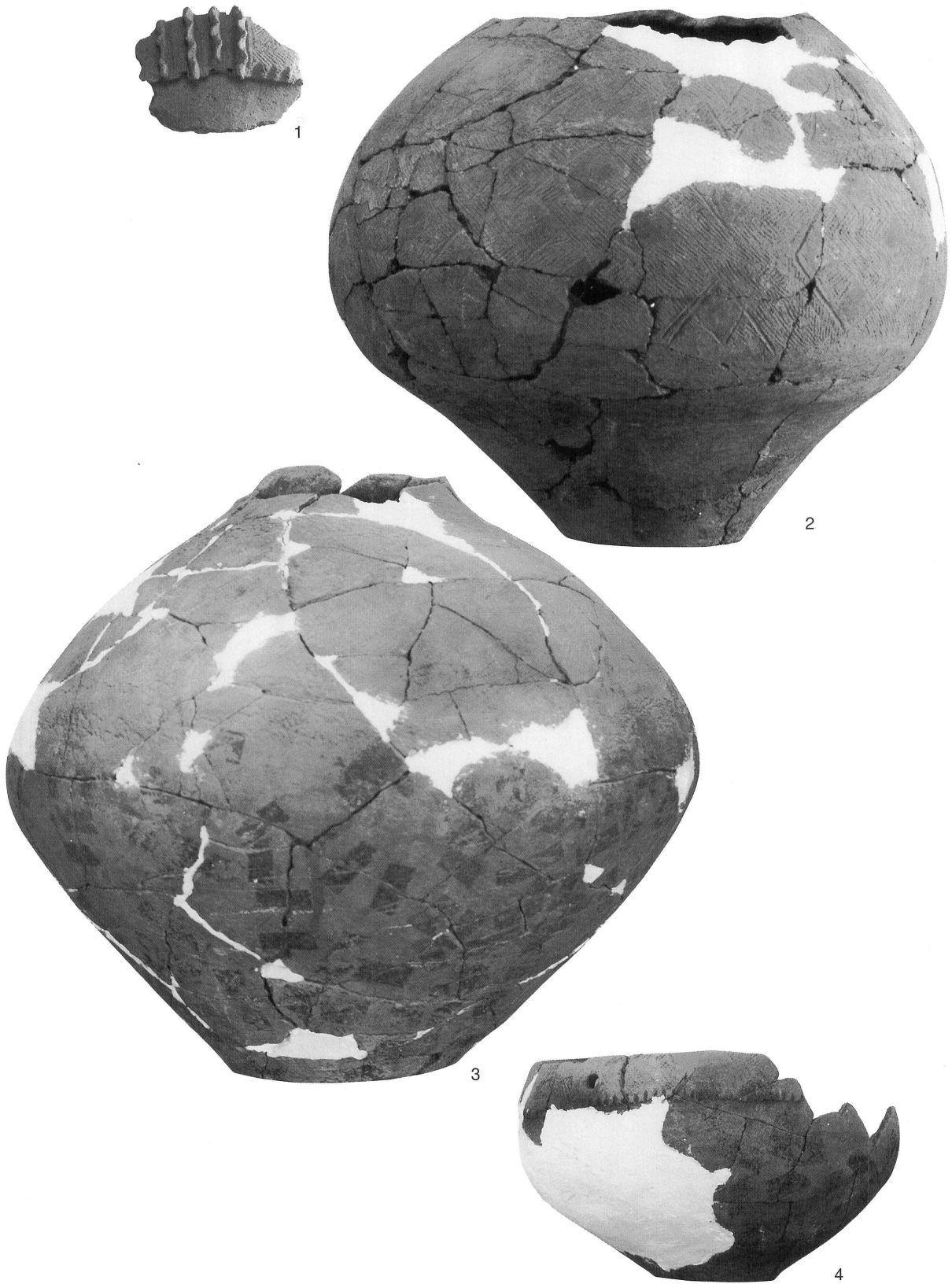
105号方形周溝墓

南祇園原遺跡



201号 (1～8) 203号 (9～11) 出土遺物 (5～8は1/2、他は1/3)

南祇園原遺跡



203号 (1 ~ 3) 204号 (4) 出土遺物 (1 は1/2、他は1/3)

南祇園原遺跡



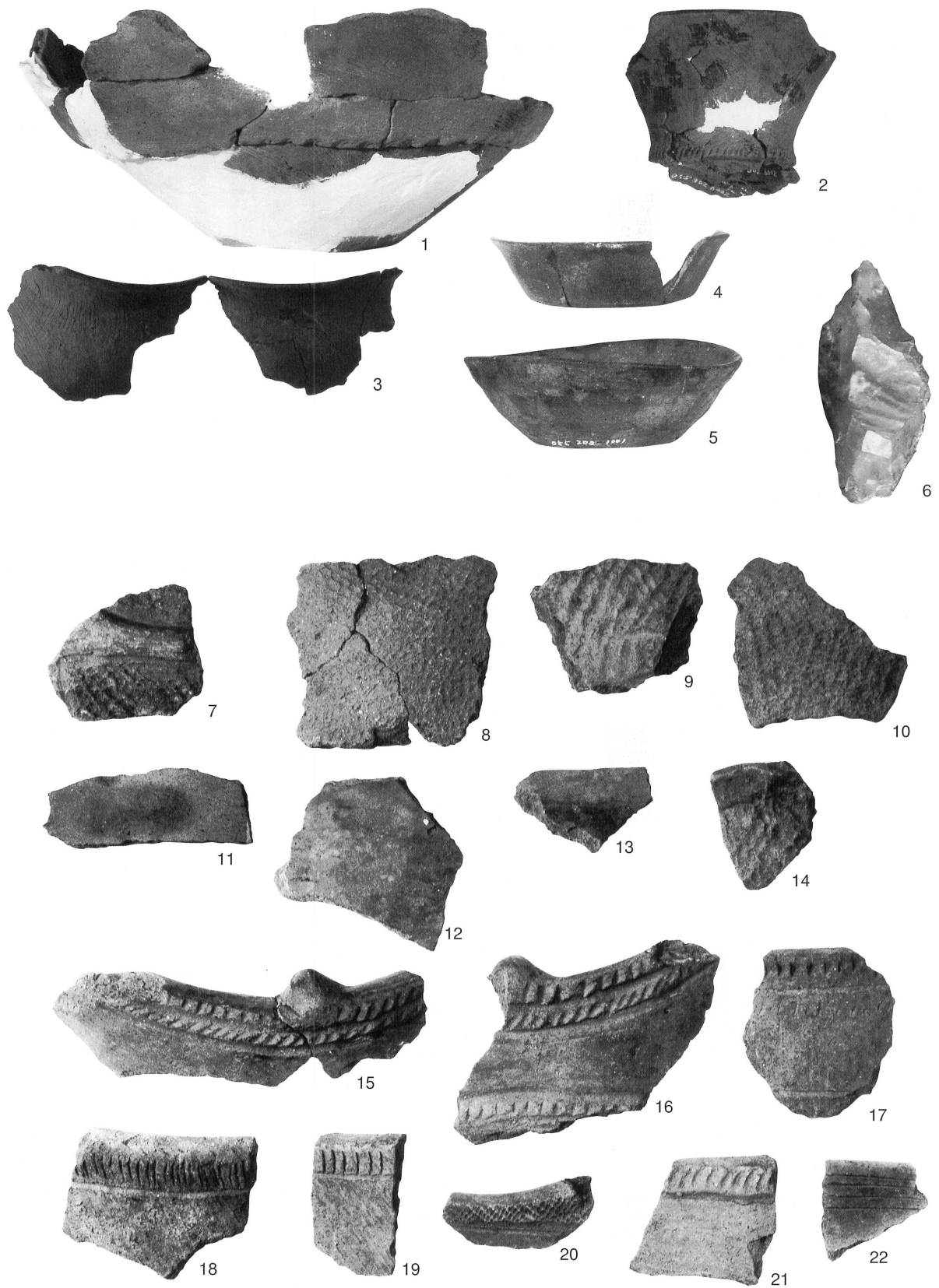
205号 (1~11) 206号 (12~16) 出土遺物 (1/3)

南祇園原遺跡



103号 (1~3) 104号 (4~6) 出土遺物 (1/3)

南祇園原遺跡



遺構外出土遺物（1～5は1/3、6は1/1、7～22は1/2）

持塚5号墳・上神台塚群



遺跡の航空写真（国土地理院、昭和36年）



調査前の全景（北西から）



持塚5号墳トレンチ設定状況（北西から）



同、周溝北西コーナー検出状況（南から）



同、周溝北西コーナー検出状況（南東から）

持塚5号墳・上神台塚群



持塚5号墳周溝北東コーナー（南西から）



同、周溝セクションC（北から）



上神台塚群1号塚トレンチ設定状況（北から）



1号塚および2号塚（手前）検出状況（南西から）



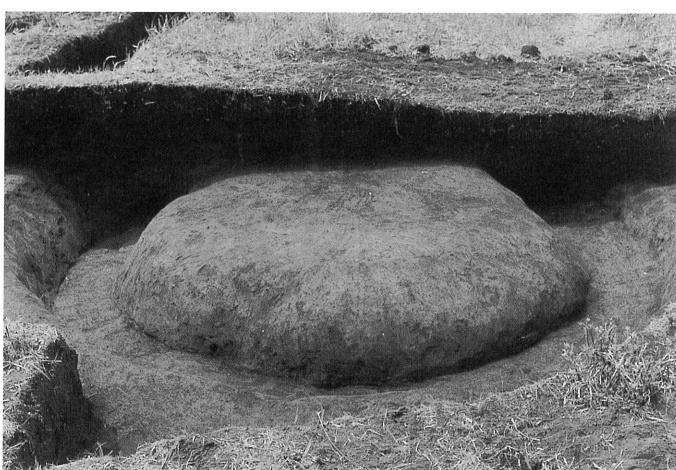
2号塚トレンチ設定状況（南東から）



2号塚検出状況（北東から）

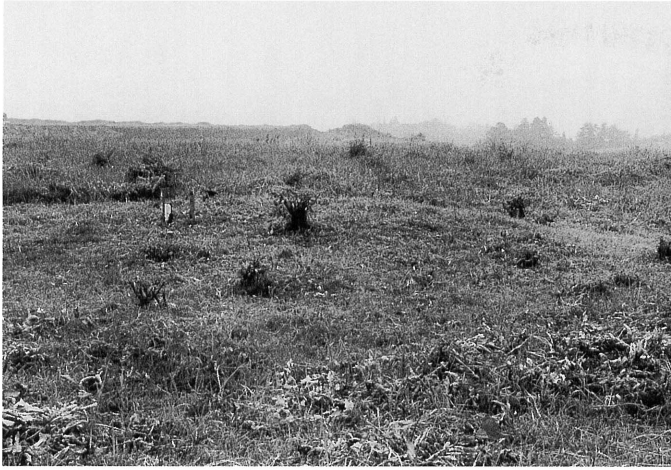


2号塚A北東コーナー（北から）

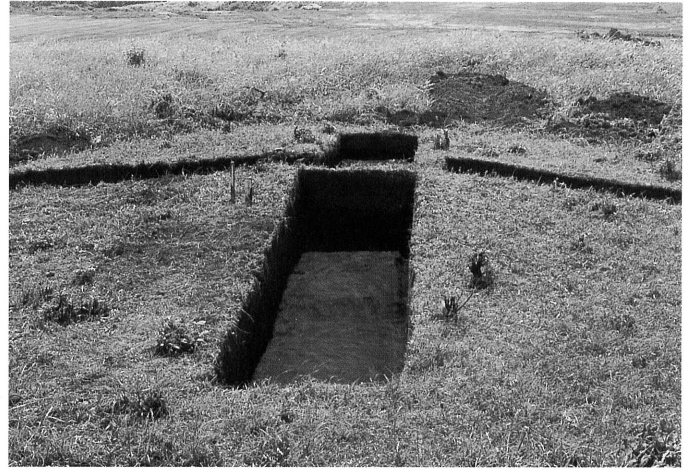


2号塚B検出状況（北から）

持塚5号墳・上神台塚群



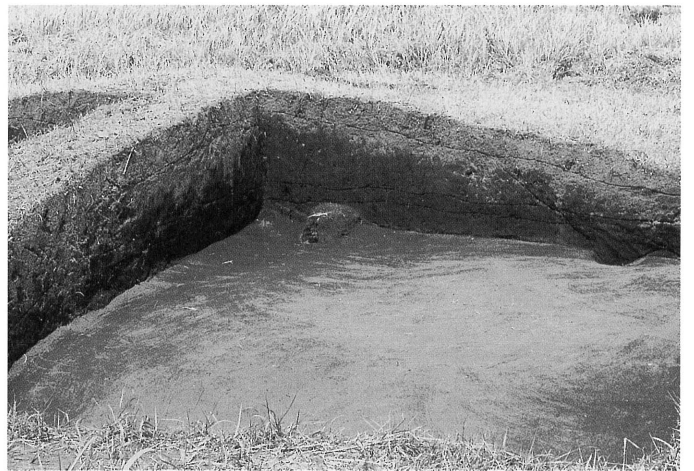
3号塚調査前風景（南西から）



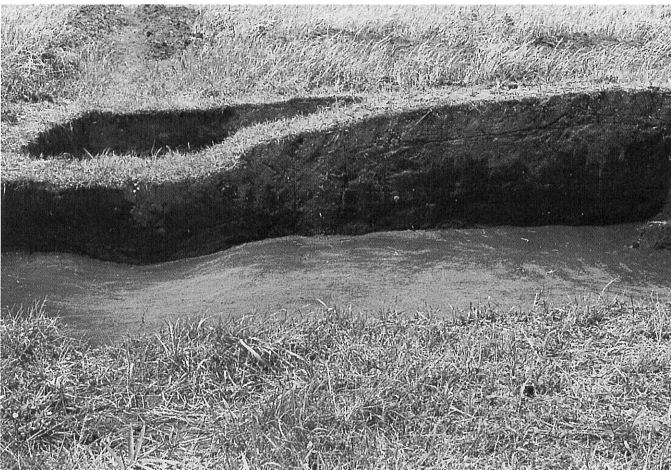
同、10トレンチ（東から）



4号塚調査前風景（南西から）



同、13トレンチ（南西から）



同、13トレンチ（南から）



5号塚調査前風景（南西から）

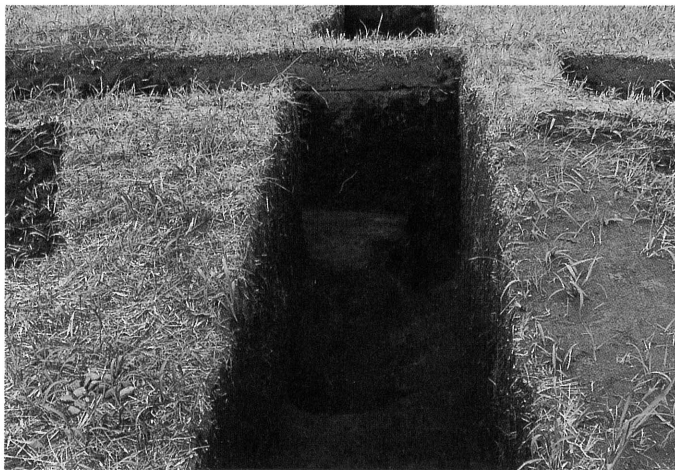


同、検出状況（南西から）



同、19トレンチ（南から）

持塚5号墳・上神台塚群



5号塚17トレンチ内土坑（西から）



6号塚調査前風景（南西から）



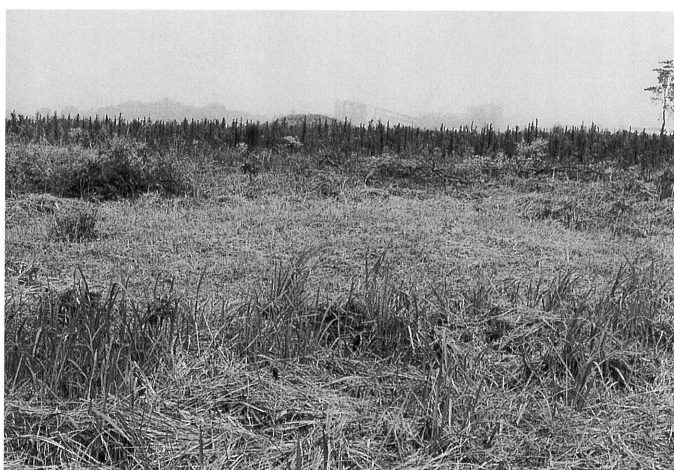
同、遠景（南東から）



7号塚調査前風景（南から）



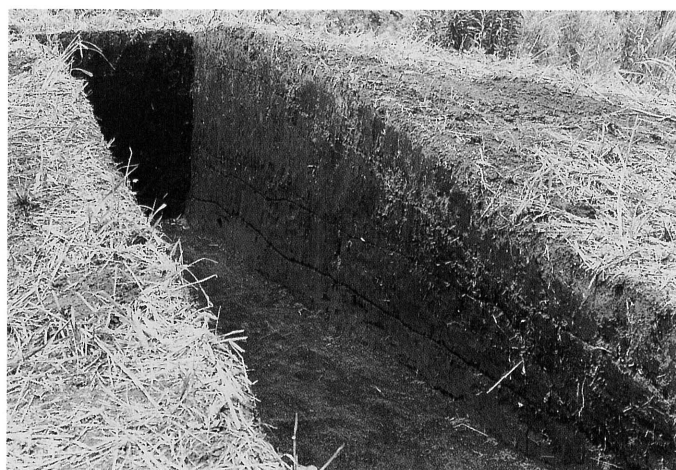
同、27トレンチ（南から）



8号塚調査前風景（南東から）



同、29号トレンチ（南東から）



同、28トレンチ（北東から）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いちはらしみなみぎおんばらいせき じょうしんだいつかぐん もちづかごごうふん
書 名	市原市南祇園原遺跡・持塚5号墳・上神台塚群
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	上総国分寺台遺跡調査報告
シ リ ー ズ 番 号	Ⅷ
編 著 者 名	高橋康男・櫻井敦史
編 集 機 関	財団法人 市原市文化財センター
所 在 地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL0436(41)7300
発 行 年 月 日	2002年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみぎおんばらいせき 南祇園原遺跡	ちばけんいちほらしこくぶん 千葉県市原市国分 じだいちゆうおう ちようめ 寺台中央2丁目 ばん 2番	12219	055	35° 29′ 37″	140° 7′ 22″	19771101～ 19771231	2,000m ²	土地区画整 理
もちづか ごうふん 持塚5号墳	ちばけんいちほらしさいひろ 千葉県市原市西広 ちようめ ばん 4丁目9番の一 部	12219	311	35° 29′ 13″	140° 7′ 21″	19721201～ 19721231	古墳1基	同上
じょうしんだいつかぐん 上神台塚群	ちばけんいちほらしみなみ 千葉県市原市南 こくぶんじだい ちようめ 国分寺台4丁目 ばん 9番他	12219	312 } 320	35° 29′ 14″	140° 7′ 21″	同上	塚9基	同上

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
南祇園原遺跡	集 落 墓 域	弥生時代 奈良時代 古墳時代前期	竪穴住居跡6軒 竪穴住居跡2軒 方形周溝墓5基	縄文土器（中・後 期） 弥生土器（後期） 土師器（古墳時代前 期、奈良・平安時 代） 須恵器（奈良・平安 時代）	弥生時代後期～古墳時代前 期の集落と方形周溝墓群。 方形周溝墓からは東海系土 器が出土。 上総国分寺の南方に同時 期の集落があることが明ら かとなった。
持塚5号墳	古 墳	古墳時代	古墳1基		7世紀後半の方墳
上神台塚群	塚	不明	塚9基	須恵器（古墳時代終 末期）	持塚5号墳に続く、終末期 古墳群の可能性がある。